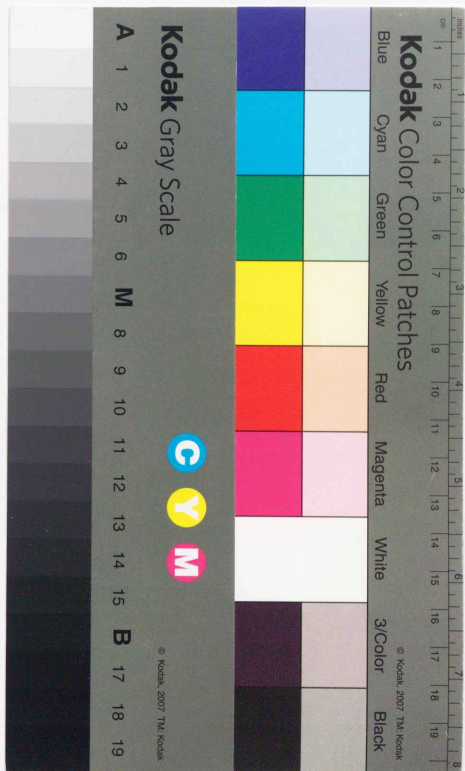


貞奴フォーラム機関誌 KOHYOH

香葉 創刊号



特集 川上別荘萬松園 所有者の変遷と新事実



明治四年、東京日本橋の面替町前屋の末裔として生まれ、貞奴は、ほんの六、七歳であったにもかかわらず、自らの意志で芸妓置屋、濱田家へ免告の養女となり、芸の道を邁進した。類いまれな美貌と手は放けた才知、そして才能への絶大な情熱により、難波の頭から時の宰相伊藤博文をはじめ、政界の重鎮から、情の花とよこはとほやれまされた。とりわけ、まだ十六歳だった彼女が、伊藤博文の大日本帝国憲法の草案づくりの現場に立ち会ったことは、特筆に値します。

オッペケベ節を馳せた自由民権運動の壮士、川上音二郎の妻となつてからは、新演劇、劇場改善運動の旗手となつた天才物心両面を支え続けた。様々な苦節を経て、二十七歳のとき、川上一座の一角として渡米、本邦初の女優としてサンフランシスコでデビューを飾った彼女は、一座と共に、艱難苦節の果てに、アメリカ各地の巡演を成功裡に終え、一九〇〇年のハリウッドに挑みます。舞踊における退しの心情表現で、シネマ、ヒカ、ロマン、ブッチーニなど、名だたる芸術家たちに感銘を与えた彼女を座長の音二郎に、フランス政府はワグネル・ド・アカミー勲章を授けました。当時ヨーロッパに巻き起こっていた日本ブームは、西欧芸術界の浮遊行に破るヒントとして、オーストリア、フランスなどのサロンで議論の的となつていきましたが、過性のエピソードとしての域を出ないと思われていました。が、貞奴の生きた舞臺術によって、より広汎にかつ強烈に刻印され、正當性を付与され、不動のものになつたといえます。欧州では、文化・芸術の水準が諸国に国威を至す指標でもありましたから、彼女の功績は露戦争の勝利に匹敵したといつて過言ではありません。

帰国後の彼女は、海外での見聞の結実、諸方面の近代化を義務とする日本の実情を憂鬱するようになり、女優養成所を開設するも、が国の近代史、演劇史、女性史の結節点を乗り越えようと、心血を注ぐ存在となつていきます。



昭和8年、62歳となった貞奴は、岐阜県各務原市鶴沼の、風光明媚な木曾川沿いに、桃光院貞照寺を建立し、毎年、1月、5月、9月(正五九参り)にこの地を訪れていました。写真は貞照寺山門前。傘をさしている人物の左側、黒いコートの女性が貞奴です。

した。四〇歳のとき、夫に先立たれたのですが、その六年後、舞台を引退した彼女は、実業界の要請に応え、福澤桃介の日本初のダム式水力発電に命をかけて献身的なことになります。その傍ら、自らも川上朔布を起業し、女たちの先駆的な福利厚生に努めます。その頃の貞奴は、葉御殿と呼ばれた名古屋市内洋館と、現在、桃介記念館としてのこされている南木曾町の別荘とを行ったり来たりしながら、八面六臂の活躍を逞いでいきました。ダム建設が一旦落し、自らの役目が終わった判断した彼女は、すばしりと身を引きます。一度は、これも日本で初の児童劇団の創設に着手したのです。

日本が急坂を転がるように満州事変へと向かうころ、晩年を迎えた貞奴は、各務原市鶴沼の木曾川を背にした風光明媚な地で、別荘、萬松園の建設に取り掛かりました。その建物は、当時最高峰とされた名匠たちの精算凝らした技法により、珠玉の文化財として、今日、高い評価を得ています。不動尊信仰の厚かった貞奴は、その別荘の真向かいに、貞照寺という真言密教の寺院を建立する計画を意を遂行し、移しました。本堂に小川善心の彈身作である不動明王像を本尊として安置し、莊嚴華麗な入仏式が執り行われたのは昭和八年十月十八日のことです。七十五歳で他界した彼女は、貞照寺の奥に設けられ、靈廟に、いまでも静かに眠っています。

貞奴の生涯に触れた幾多の作品中、昭和六年一月六日放映のNHK大河ドラマ「春の波濤」などが、つとに有名ですが、最近では、山口玲子、レズリー・ターナー、ベター・ハンター・アーリーといった研究者の著書を手がかりに、貞奴の足跡を更俊について、より深く洞察し、丁寧に扱おうという機軸が高まっています。このよりの現状に鑑み、わたしとしては、貞奴フオラムというグループが集い、学者の成果を集約し、貞奴その人と貞奴の生きた時代について、悉く検証しつつ、今日の糧とする意図をもって、貞奴の雅号を冠した機関誌「至聖」を、茲に創刊していただくことになりました。

貞照寺住職 & 貞奴フオラム代表



目次

特別寄稿

川上貞奴と萬松園

各務原市長 森 真

4

貞奴をめぐる人々と日本人の気概
萬松園との出逢い

貞照寺信徒總代 武藤容治(衆議院議員)
川上別荘萬松園オーナー 森田満夫・森田節子

9 7

閑話休題「貞奴の生きた時代」

特集 川上別荘萬松園 建設年月日が判明

森 頭子

13

きっかけは井端瑠美子さんとの出逢い

売渡証書と勝手

川上別荘「萬松園」の土地および建物の所有者の変遷

西田 壽

貞奴ご遺族川上新一朗氏へのインタビュー

藤本尚子

都築紡績時代の川上別荘「萬松園」

植野孝子

34

閑話休題「貞奴の暮らした場所」

自由研究・書評

一葉御殿の変遷

長谷川時雨「マダム貞奴」をめぐる一考察

植野孝子

「桃介と貞奴」

仲谷基作

38

「貞奴という奇蹟」

藤本尚子

36



閑話休題「命を賭ける」

エッセイ・雑感

「楯は錆びても」 〈野暮と粋〉

江尻勝典

46

福澤桃介の評判

仲谷基作

電力王福澤桃介と電力の鬼松永安左エ門

仲谷基作

51

文献紹介

藤本尚子

閑話休題「桃介橋」古写真

男伊達なら「木曾谷の桃介橋」解題

藤本尚子

55

評論

貞奴、心の旅「二期」会芸道」

藤本尚子

59

貞奴フオーラムのご案内

貞奴フオーラムとは

貞奴フオーラムのあゆみ

川上 初 様 御世界を悼む

謝辞及び編集後記

64

63

62



川上貞奴と萬松園



森 真
各務原市長



漢斎泉英 「木曾街道六十九次・鶴沼」

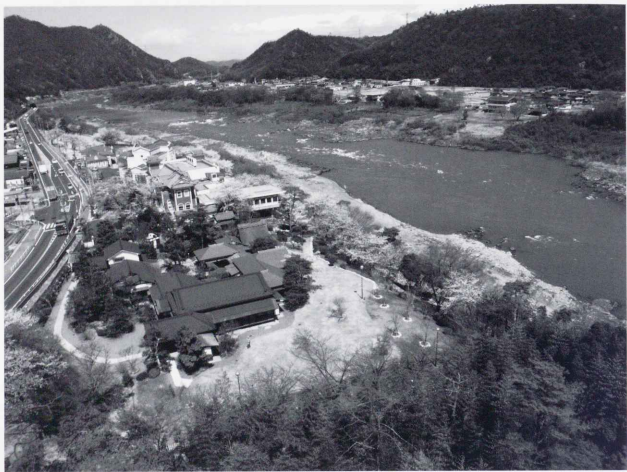
萬松園は、当時すでに世界的な役者であった川上貞奴が、福沢桃介から土地を譲り受け、昭和の初期に建てた別荘です。名勝木曾川の風光明媚な景観にだけこむように静かにたえずんでいます。典型的な和風建築で、当時最高品質の木材や金具類を発注し、全国から一流の職人を集め建てた逸品です。建築の細部、そして調度品のすべてにいたるまで特別注文で、日本的美的感性あふれる壮麗な芸術品です。今日同じものを建てたら数十億を要すといわれていますが、より重要なのは、今では同質の木材その他の材料が手に入らない、専門的な職人もいないということです。

平成一六年に、所有者である紡績会社が売りに出しました。購入者がこの歴史的建築物を譲り、そのあとに分譲住宅やマンションを

建ててしまうことが懸念されました。有識者からは市で購入するよう希望する声が上がります。市としても苦慮せざるを得ませんでした。購入は可能でも、維持管理に未来永劫お金がかかるからです。

そういう最中、創窮館の森田社長から引き取りたい旨のお話がありました。氏はとりわけ芸術や歴史的建造物に造詣が深く、それらの価値ある敷地を所有されています。無論、商用ではありません。私は同氏と萬松園について協議を重ね、この建造物のきっちりした維持管理、②適時、市民公開していただく、などの協定書をつくり、相互に交換し現在にいたっています。

良い都市の三条件は、都市の中の自然、都市の中の文化、そして都市の中の歴史であるというのが私の持論です。



広い敷地にゆつたりと建てられた手前の大きな建物(建坪 150坪、部屋数 25~26室の牧寄屋建築)が川上別荘「萬松園」である。それでも豊かな水量を誇る木曾川には圧倒されるように見える。四十代半ばを過ぎた貞奴の後半生は常にこの木曾川と共にあった。

写真は岐阜県各務原市鶴沼宝積寺町三丁目辺りをフォーカスしながら、下流側から上流を臨む角度で撮影されたものである。この川を遡ると、遙か上流で岐阜県境を超え、雪深い長野県へと続く。かつて読書村と呼ばれた現在の雨木曾町には、貞奴が、ダム建設工事の指揮をとっていた福澤桃介に随行中、仮寓した拠点、大洞山荘(現在の桃介記念館)がある。

萬松園の対岸は犬山市であるが、下流に向かうと名古屋市の白鳥貯木場に達する。ダム建設後は、かつて材木の集積場として賑わったその貯木場もさびれ、美濃加茂市から各務原市に至るこの流域を下っていた木曾川風物詩ともいべき筏も忽然と消えた。いまは日本ラインと称される観光名所として人々に愛されているものの、ここに貞奴の別荘が存在することを知る人はさほど多くない。

左に見える国道をはさんで貞奴の建てたお寺、桃光院貞照寺があり、現在は成田山の末寺として維持管理されている。檀家は少なく参拝客も多くないとはいえ、犬山市にある成田山名古屋別院大聖寺の隆盛により、経営的に支えられ、恙なく保全されている。貞照寺の敷地には貞奴縁起館があり、音二郎と共に海外公演で活躍した折、フランス政府より授与された勲章や、ピカソの手になる貞奴の追慕の舞姿を描いたデッサンの複製などが飾られている。本堂には小川善心の遺作となった見事な不動明王像が御本尊として安置されており、堂の周囲には貞奴の信仰を物語風に描いた木彫がめぐらされている。奥の院ともいべき貞奴御霊廟の付近はさらににも淋しく、背後の山の霊気がしんと降りてくる。

美しい自然と贅を凝らした建物。麗人の魂がこの界隈をさ迷っていると、わかる人にはわかるので、賑わいの少ない静かな佇まいがむしろ嬉しいもある。



↑福澤諭吉
・福澤桃介
(旧姓 岩崎)



慶應義塾

貞奴をめぐる人々と日本人の気概

(衆議院議員)

貞照寺信徒総代 武藤容治

わたくしの貞奴への関心について申しますと、先代の武藤嘉文に



このブームの背景には、次のような事情も伏在します。明治とい
う近代国家生成のダイナミックな歴史に関わりつつ生き抜いた稀
代の才女である貞奴と、彼女をめぐる英傑たちの強靱な魂に比べ、
現代のわたしたちは、なんと不甲斐ないことかと、慨嘆を禁じ得ま
せん。貞奴・音二郎・桃介の足跡をたどることによって、わたした
ちは彼らの強い意志と行動力に触れ、現代の難局を乗り越える上で、
自らの心の糧としていかねばなら
ないと、敬虔な思いにうたれる昨
今です。それ故、このムーブメン
トにひとしおの感懐を覚え、藤本
先生をはじめ関係各位の地道なご
尽力に、深甚なる敬意と感謝を申
し上げる次第です。

昨年、貞奴生誕一四〇周年と川上音二郎一〇〇回忌が重なった
ことにより、二人の偉業に着眼した記念行事が全国規模で展開され、
一大ブームに沸きました。博多、茅ヶ崎など、貞奴・音二郎に所縁
ある地域の皆様の先駆的な取り組みと連携しつつ、当各務原市にお
きましても、貞奴フォーラムという継続性のある研究グループが誕
生し、学際的な取り組みへの挑戦がなされました。このブームを決
して一過性のものにはならないという共通認識が、博多、各務
原、茅ヶ崎という三拠点の人々の共通認識となりつつあるようです。

この度は、貞奴フォーラム機関誌「香葉」ご創刊の由、心よりお
祝いを申し上げます。



↑建物右側の部分が萬松園正面玄関。左の植え込みの後ろに内玄関が位置する。建物の東西南
北すべてが手入れのゆきとどいた庭園となっている。表向きは書院造りを基本としているよう
だが、苔の美しい中庭には現オーナーの心配りで新たに小流水が設けられ、小暑の候、平家重
が放たれるなど、寝殿様式にふさわしい風趣、優雅さも兼ね備えている。↑裏側の「茅葺の間」



の象徴ともいふべき瀟洒な洋館が、長年放置され、蜘蛛の巣と埃にまみれた様を想像ください。人の世の栄枯盛衰の、いかにいかに、傳さが胸に迫り、涙がにじんで参ります。かつて優れた職人が丹精をこめて造り上げたその精気が怨霊となって棲みつき、壊さないうでくれ、甕らせてくれ」と、斉に雄叫びをあげるよでして、まずは、これらの理髪めをしないことには、手をあけることができず、解体業者さんも力減っていました。そして、このとき、すぐ近くにあるもうひとつの優れた古建築、川上別荘「萬松園」の存在を知らされたのです。

後藤別荘の買収から二三年後の平成十六年に、いよいよ川上別荘も銀行の手で処分される時が来ると、都築紡績さんより伺いました。すでに解体が提案され、天の橋立の古建築愛好家の所へ移築というお話が出ていました。しかし、わたしたちが川上別荘萬松園を实地に検討いたしました折、その目の前に貞照寺があるのを知らず吃驚しました。この二つは何かあつても引き裂くことのできない一体のものであると、ぐさりと刃を突き刺された気がしました。都築紡績さんも同じ思いでしたが、萬松園をこのまま貞照寺と同じ場所に置いておけるものならばと、即決で、わたしたちに譲ってくださいることになったのです。

当時の川上別荘は、雑草が生い茂り、蔭からまれた樹々が鬱蒼とした中に埋もれておりました。屋根の一部が崩れるなど、外観の損傷が激しく、玄関から奥へ進むと、埃と雨漏りに汚れた座敷の痛ましい状態が目に見られました。それでも、天井など、各部屋のつららが贅を極めたものであることが見てとれ、荒廃した要素と対照をなすが故に、いっそう、凄絶華麗な風情を湛え、胸を打たれるのです。

購入に際しては、正直、それほどのものとは知らず、格別の意気込みがあつたことでもなかったのですが、これ後、いへんものをお引き受けしてしまったという思いはその後、燃えるばかりでした。最初の訪問客は京都キートンダム女子大学人間文化学部教授の島居幸代先生の二行でした。比叡山の阿闍梨様光永覚道様と愛知万博スイス館副館長フィリップ・ニール氏が同行されていました。その方は茶人としての日本名をお持ちで、拙齋庵若翁宗翠と名乗っていらつしやいました。若翁氏は日本通で知られており、ご自身の遷葬記念茶会を金閣寺で催されたほどです。お三方とも、日本文化と建築について、格別の造詣をおもちでした。この方々が、口をぞろぞろと、この近代数寄屋建築を激賞されるので、わたしどもも改めてその真価を認識したという次第です。その後、日本でも有数の建築家といわれる諸先生の来訪が後を絶たず、今日にいたつておられます。こうして、平安の昔から連綿と続く日本の建築史上、この貞奴さんの労作が位置づけられ、徐々に正しい評価を得ていくことは、後世にとつても喜ばしいことと存じます。

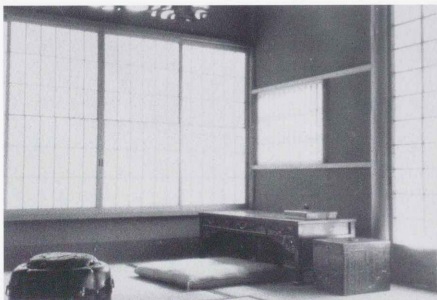
貞照寺にお参りをしますと、これは、わたしたちの意志というより、貞奴さんの意志であつたのだと、そんな思いにかられます。いくつかの天の配剤ともいふべき偶然が、萬松園の現在の運営を可能にしているからです。川上別荘を単独ではなく、後藤別荘と共に入手したことで、後藤別荘のほうを中心として結構持場を営むことができ、それによって、萬松園の修復や、管理維持のための経済的基礎を確立できたということなども、その幸運の一つとして、数えていただいではないでしょうか。

以上のようないきさつで、川上別荘「萬松園」は現在の地にとどまることになり、知多に持ちかえつておりました後藤別荘も、その

数日をかけ、精魂をこめ、各部屋の清掃をすませますと、驚くばかりに様相は一変しました。明るく凛とした佇まいが現れたのです。なんという心地よい、すずろぎの空間であろうと、しばし、陶然といたしました。随所に女性らしい気配がみえ、それも最新鋭の文明を駆使した合理的な工夫が散りばめられており、それでいながら伝統美を損なうことなく見事な調和を示していたので、このように繊細な、非の打ち所のない、いかにも女性らしい感性にあふれた設計思想を、あの戦争に向かう殺伐とした時代に、どのようにして体得したのであらうと、貞奴の天才ぶりに驚嘆するばかりでした。これ以上ない居心地のよさに浸りながら、ありし日の貞奴が、その晩年に、過ぎし全盛期の「足きぬ感懐をこめ、人生の集大成として、芸術的感性を総動員し、この建物に取り組んだ様子が目に見え、浮かぶようでした。彼女のもの静かな息づかいを感じながら、真摯な思いに駆られて、思わず居すまいを正したものです。



隣りに再建したわけですから、結果として、貴重な文化遺産が二つとも、もともとの出生の地、各務原市に留まることができたわけです。これが、ささやかながら御地への貢献となつたのであれば、望外の仕合わせと存している次第です。



貞奴その人が、ついさっきまで座っていたような気配を感じさせる居室空間です。彼女はここで、何を頼み、どんな文を書き、誰に思いをめぐらせていたのでしょうか。ふと上げた眼差しをむこうに、ゆく雁、散る紅葉、そして浴々たる木曾川の水の歌が・・・。

貞奴の生きた時代



高町の芸妓置屋濱田家にいた頃のうら若き貞奴。藝妓(おしやく)の頃の源氏名は小奴(こやっこ)。襟巻(えまき)後は霞町の由緒ある名跡、奴(やっこ)を襲名。

貞奴が生れた明治四年(一八七二)は、いっただいのような時代だったのだ。

江戸幕府の崩壊が一八六七年。その翌年の一八六八年が明治元年です。江戸は東京と改められ、即位したばかりの明治天皇と新しい官僚機構が京都から東京へと居を移し、僅か三年後でした。尊皇攘夷を旗印とした明治維新。新たな世にもかわらず、新政府が開国和親を唱えたため、かつての攘夷派の憤激やるかたなく、戊辰戦争の論功行賞への不

満なども重なって、反乱や暗殺が横行していました。

新勢力内部の権力闘争も熾烈でしたが、そんな中で勝ち残っていたのは政治的議論にふけていた築地梁山治と呼ばれた面々、木戸孝允、伊藤博文、井上馨など、ずば抜けた英語力と緻密な戦略によって、外国との交渉力に長けた開明派でした。

当初、彼らは、福澤諭吉もふくめ、実学と殖産を標榜していましたが、やがて憲法論議が起きると、政体をめぐり、袂を分かつようになります。最後に勝ち残ったのが伊藤博文です。ヨーロッパの歴史という点、プロイセン型の、近代産業と軍事力に力点を置いた体制だったようです。諸藩が自立した経済を営んでいた封建主義から脱皮したばかりの日本が、別強に伍していくためには、強い王権のしるに国民が結束したほうがよいと、伊藤が考えたのでした。

もの心ついた貞奴の育った環境は、この伊藤の勢力の庇護下にあります。個人の自尊心が国という概念としっかり結びついていて、そういう時代精神のもと、社会的使命感と個人としての人生設計を合致させた英傑たちの生き方を学び、多感な青春期をすごした少女、それが貞奴でした。

貞奴が芸能の世界に身を投じるきっかけになったのも、この



貞奴に関連する写真としては、珍しく生活臭の漂う一葉です。火鉢に手をかざし、少し前かがみになった晩年の貞奴を思い浮かべてみましょう。

これは明らかに、日常の用途に供された居間の趣きです。ところが、右側に少し写っている襖に、いくぶん異質な気配が……。

この襖は隣接する仏間のものです。目を凝らすと襖の手前に次の間との境をなす敷居が足元に見えます。

仏間は三畳ほどの狭い空間ですが、黒地に金泥で描かれた菩提樹の襖と、天井画の天女と迦陵頻迦(かりようびんが)がとても印象的です。萬松園を訪れた人々の心に、深い記憶を刻みつけずにはおかない、特別な空間といえるでしょう。

さて、その襖絵ですが、菩提樹の根から蟻が這い出て、仏間を一周するように描かれています。蟻たちは煩惱に苦しみながら糞土をさ迷っているのでしょうか、それとも釈迦の教えを世にひろめようとする重い使命を担っているのでしょうか。

迦陵頻迦は上半身が人で、下半身が鳥という特殊な身体で極楽浄土に棲むといわれています。歌舞音曲に優れた芸妓などを「さながら迦陵頻迦のようだ」と形容します。

頭上を舞う迦陵頻迦と地を歩む蟻。いずれも仏教の深甚な意味性を帯びています。これらを手がかりに、晩年の貞奴の境地を想像してみてください。

読経三昧と瞑想。現代の日本人が日々の喧騒の中で忘れ去った和の魂を呼び起こすことができるかもしれません。

歴史のダイナミズムが作用して前屋として、日本橋の実家は越前番商でしたが、維新の激動に飲み込まれたのを機に、芸妓置屋の養女となりました。

維新前後、悪貨や賤貨の湧造が相次ぎ、乱発された藩札のゆくえや、新政府発行の太政官札や民部省札、そのまた贋札が出まわるなど、通貨は混乱をまわっています。明治二年七月、東京高輪において、明治政府首脳とイギリス・フランス・アメリカ・イタリア・ドイツの五ヶ国の駐日公使による会議が開催され、日本は賤貨の回収と近代貨幣制度の導入を国際公約することになったのだ。

新貨条例で圓(円)が制定されたのは貞奴の生まれる二カ月前のことでした。江戸時代の両替商の一部は銀行となったものの、多くは他業種への転業や倒産を余儀なくされ、貞奴の実家も徐々に逼塞せざるを得なかったのでしょう。



明治四年に文部省が設置されました。翌五年、太政官布告第214号として、日本最初の近代的学校制度を定めた教育法令が公布されました。小学校は四年制。真奴がこの学校に通ったかどうかは不明です。



明治四年三月二日、東京・京都・大阪間で新式郵便の制度を実施



岩倉使節団

左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通。

明治4年11月12日(1871年12月23日)から明治6年(1873年)9月13日まで、日本からアメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国を歴訪。総勢107名。

身分制度の変遷

明治の身分制度改革といえば、四民平等が実現したという認識が今日、一般的ですが、明治二年の改革では、華族・士族・卒族・平民の四階級に再編されたというのが事実です。華族は公家と旧大名、士族は旧幕臣と旧藩士、華族・士族と軽以下の下級武士、平民が農・工・商それが明治三年になって、華族・士族・平民の三階級に大別されることになりました。平民とされた被差別民がなくなりました。農民とされたのは、その後ですが、対象者にとって、必ずしも喜ばしいことばかりではなかったようです。特定の職業についての独占権が消滅するともに、それまではなかった納税の義務が発生したからです。人道的な理由のみならず、国民としての義務を担う対象をひろげることが為政者側の狙いだったのです。とりわけ徴兵制の施行に先立って、平民間の身分障壁の撤廃で、徴兵しやすい環境を築きたかったのだろうと推察できます。

明治四年には、華士族との通婚と職業移動の自由が認められました。今日の我々は、「自由」という言葉すら存在しなかった近代以前の暗黒に慨然とします。

廃藩置県

明治4年7月14日

薩長土の藩士を結集し、明治政府直属の、御親兵と呼ばれる軍隊が組織され、厳重な治安維持下で、廃藩置県が断行されました。これは藩士200万人を解雇することを意味したのです。



明治4年の銘の入った一円金貨
(この画像はフリーソフトウェア財団が発行の GNU Free Documentation License に示されるバージョン 1.2 またはそれ以降のライセンスの下で提供されています。)

明治四年の できごと!!



大阪製糸工場 (大阪製糸)

明治四年二月十五日には、前年に試験稼働を始めていた大阪造幣寮の創業式が行われました。製造を防止するため、香港から最新式の鋳造機を購入して、金貨、銀貨、銅貨を発行し、同年十二月より、新貨幣との交換が行われるようになりました。

左の写真が大坂造幣寮です(ただし、撮影は明治五年)



乗りの革命

乗りの革命

一八六七、八年ごろに登場した人力車がこの頃、急激に増え明治五年になると、かつて一万台もあった駕籠が姿を消し、四万台もの人力車が行き交うようになりました。

(左の写真は毎日新聞社所蔵の明治三年のもの)

さらに人々の耳目を驚かせたのは、なんといっても鉄道です。



よう。明治三年に着工し、明治五年に新橋・横浜間が通しましたから、真奴が生まれた明治四年には、工事の真っ最中だったことになりました。

この鉄道に反対運動が起きたため、薩摩藩邸のあった芝・品川付近を避け、築堤を海上に築いて線路を敷いたとのこと。全線二九キロのうち、一〇キロが海上線路でした。

創業時は一日二往復のみ。乗車賃は上等が一円五十銭。中等が一円。下等が五〇銭。最初の機関車はイギリスからの輸入品でした。

特集

《貞奴フォーラム共同研究》

川上別荘萬松園

所有者の変遷と新事実



女優引退後の貞奴は、日本初のダム式水力発電に夢をかけた福澤桃介に献身的な協力をし、その事業を成功に導きました。それが一段落すると、中断していた演劇への情熱を再燃させ、児童劇団を起し上げるなど、わが国の舞台芸術の発展に貢献しました。晩年にさしかかり、すべての事業から撤退したとき、心静かに沼子下湯と、木曾川下流の瀬沼に、瀟洒な和風の別荘を建てました。その真向かいに、人生の総仕上げともいうべき貞照寺を建立する拠点でもあったのです。古くなる少前、不意ながら、この別荘を手放さざるを得なくなつたようです。横山秀三という方の手にわたつていったことが、この度判明いたしました。

1

きっかけは井端瑠美子さんの出逢い

インタビュー 森 頌子

森 萬松園に、一時任んでいらつたことですが、それはいつ頃のことだったのでしよう？

井端 私は幼い頃、春蘭カリエスに罹つていましたので、両親は私を養生させるために、別荘番の梅村さんご夫婦と共に、そこに住まわせていました。戦後もないう頃です。

森 その当時の萬松園はどんな様子でしたか？

井端 私の記憶では、先ず、内玄関に入って、廊下の左側に電話ボックスがありました。そして、右に折れる廊下があり、その側面に腰窓がありました。突き当たりには黒の春蘭窓の一枚板がありましたがそれは、表に出るとき、身支度を整えるために鏡代わりに姿を映す役目でした。夏には西風が入り、とても涼しかったです。広い部屋には大きい能舞台があり私はそこで寝起きをしていました。奥には内蔵もあり、甲冑が座つていました。その前に洋館もありました。また、くくりがあつて茶室もあつたようです。水屋には竹の簀子があり、銅の流しの上には花器がふせてありました。そして、そこからは中庭も見えました。

板戸に唐子の絵が描いてあるところがあり、その部屋の天井には天女の絵が描かれていて、その目と私の目があつて、そのことを意識すると怖かつたことを覚えていますが。そこは仏間では？とおつしやるのですが、当時は仏壇のたぐいもなく、違う印象でした。

夏に親戚の者が避暑に来ては、桃太郎神社まで、木曾川を泳いで、横断してました。私はそこで溺れたこともありましたが、その後母は桶町にある別荘に池を作つてくれて、そこで泳がせてくれました。母はあれこれ養菜のあるものを食せてくれましたので、次第に病氣は回復に向かいました。また、向かいの貞照寺まで、よくとつとつとこと歩いていきました。まだ今のようには整備されておらず、山の清水が流れてきて、沢庵もとてもたくさんいました。しよう？

森 そんな思い出深い「萬松園」とは、どんなご縁だったのでしよう？

井端 その当時横浜に養子にいつた父の弟、横山秀が川上貞奴から買い取つた允渡証書あり、昭和20年12月13日付のことで父は別荘として使用していただきたいと思います。

森 いつごろまで、いらつたのですか？

井端 私は昭和三年四月に那加第二小学校へ入学したのですが、その日の写真を見ると、おでこに白い布状のものがみえます。それはその数日前、家族でお花見をして帰る途中、自転車と衝突をし、怪我をしたので、その包帯だったのです。しかし、この怪我を機に家族の所へもどりましたので、萬松園に居たのは、その頃までだったと思います。

森 貞奴は昭和二年十二月七日に熱海で亡くなつていますが、日本の女優第一号、歴史上の人物である貞奴の別荘に一時いらつちやつたことがあることをどう受けとめておられますか？

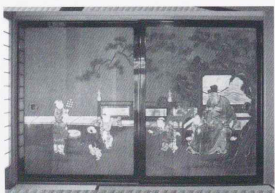
井端 私は子供の頃でしたし、貞奴のことはあまり詳しくは知り

ませんでした。でも、今、こうして川上貞奴の直筆の入つた書類を手に入れていることに對して、これは、私が何かをしておかねばならぬことなんだなと思うようになりました。現在は家族にも恵まれ、私は、こうして健康で暮らしていますがやはり両親のお陰と感謝しています。

父は私が小学校3年生のとき亡くなりましたが、もう少し長く生きてくれたらと思うと残念でなりません。父は庄屋の生まれで、地方自治体の議員も勤めたことがあるようです。そして岐阜大学の農学部が那加にできたとき、周りの人々と共に土地を提供したとも聞いています。そのほかいろいろと地域のために尽力していたようですが、今は何も形としては残っていません。せめて今こうして、重要な文化財と、いささかの関わりをもたせていただいたい、嬉しい限りです。父の人の人となりの一端でも、垣間見ていただければ

森 貴重なお話をありがとうございます。これを縁に、萬松園や貞照寺にも足を運んでいただき、わたしどもも、交流を深めていただければと願っております。

井端さんは、お父上譲りですしよ、常にか、地域でも積極的にか、活躍されていきます。芯が強い反面、慈愛深く、細やかな気配りを忘れない、とても素敵な女性でした。



井端さんが記憶にのこっているという唐子の絵。題材・中国の故事「胡蝶の夢」

萬松園売渡証書と謄本

左が新たに発掘された萬松園の譲渡契約書です。井端瑞美さんの弟さんが保管していたものを、特別に複写させていただきました。土地を建物について、それぞれあるのですが、ここでは主に建物のほうを掲載します。この契約書を添付書類として、正式に登録された謄本も、証拠として、次々頁に掲載いたします。

買渡証書	買渡人 川上さか
金 五万円	昭和二十年四月二十二日
未登記載ノ拙者所有ノ不動産貴殿へ賣渡シ代金トシテ前記金額ニ領收仕候然ル上ハ該不動産ニ付故障相生シ候節ハ拙者ニ於テ一切ノ責任シ貴殿へ御迷惑相懸ケ間敷候爲後日證書依テ如件	東京市中央区市谷河田町十七番地 横浜市×××××××× 横山 秀 殿

売渡証書
金五万円也なり

未登記載まつきさじの拙者せつし
心所有の不動産を貴殿までんへ売
りわたくし代金として前記金額、ま
さに領取つまつらう。しかる上は
該不動産いふどうさんにつき故障
あい生じらう節は、せつしおに
いて一切の責せきに任じ、きてんこ
迷惑あいかげまじらう。後日
のため、証書をもつて、くだんことし

昭和二十年十月十三日
東京都中央区市谷河田町十七番地
売りわたし人 川上さか
横浜市××××××××
横山 秀 殿

川上

不動産の表示	不動産の表示
稲葉郡鵜沼町	稲葉郡鵜沼町
字茅場七千七百九十番	字茅場七千七百九十番
一、家庭番号南一七七番	一、家庭番号南一七七番
二、木造瓦葺二階建住宅	二、木造瓦葺二階建住宅
三、二階坪、六坪二合	三、二階坪、六坪二合
四、貸賃価格、千三百円	四、貸賃価格、千三百円
建築年月日昭和四年四月二十日	建築年月日昭和四年四月二十日

不動産の表示

稲葉郡鵜沼町
字茅場七千七百九十番
一、家庭番号南一七七番
二、木造瓦葺二階建住宅
三、二階坪、六坪二合
四、貸賃価格、千三百円

建築年月日昭和四年四月二十日

メモ
（法務局受付）十二月二八日
七七四号事案

謄本の記載によると、土地については、稲葉郡鵜沼村南組の所有だったものを、大正十年十二月二十七日付けで、東京府豊多摩郡渋谷町大字下渋谷四十六番地の福澤桃介が購入したとなつてます。

真奴は最初、この土地を桃介から借り受けていたようですが、正式に買い取つて所有権移転の手続きをとつたのは昭和七年八月九日でした。謄本は登記の原因として、「贈与」ではなく、「売買」であると、はっきりと明記しています。このときの川上さだの住所は名古屋市中区東二葉町八番地と記されています。昭和二十年十二月二十八日に横山秀氏への所有権移転登記に際し、東京の住所へ表示を書き換える必要が生じました。その記録により、彼女が名古屋から東京の河田町へ住所変更したのは、昭和十八年十月十四日であることが確認できます。



場に餌をやる真奴
生きものをこよなく愛した

表		部		題		表	
座落	用途	面積	用途	面積	用途	面積	用途
岐阜県稲葉郡鶴沼町字茅場七九〇番地	住宅	一階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅
昭和二十年四月一日変更							
各務原市鶴沼字茅場七九〇番地	住宅	一階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅
昭和五十六年四月一日変更							
各務原市鶴沼宝積寺町三丁目七九〇番地	住宅	一階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅	二階 四三三・八平方メートル	住宅
昭和五十六年四月一日変更							
木造瓦葺一階建							
二階 四三三・八平方メートル							

年月日	事由	面積	用途
昭和二十年四月一日	取得	四三三・八平方メートル	住宅
昭和五十六年四月一日	変更	四三三・八平方メートル	住宅
昭和五十六年四月一日	変更	四三三・八平方メートル	住宅

岐阜県稲葉郡鶴沼町字茅場七九〇番地
 昭和二十年四月一日変更
 各務原市鶴沼字茅場七九〇番地
 昭和五十六年四月一日変更
 各務原市鶴沼宝積寺町三丁目七九〇番地
 木造瓦葺一階建
 二階 四三三・八平方メートル

保存 交付 昭和二十年十二月二十八日第七七四号
 所有者 東京都牛込区市谷河田町十七番地 川上さだ
 昭和二十年十二月二十八日第七七五号
移転 原因 同月十三日売買
 取得者 横浜市中区本牧三ノ谷二百七十三番地 横山 秀

3

川上別荘「萬松園」の
 土地および建物の所有者の変遷

※土地・家屋購本を解析し、以下のようにわかりやすくまとめました。
 元各務原市文化財課長 西田 壽

土地登記簿謄本

- 土地の所在**
 稲葉郡鶴沼町字茅場7790ノ1
 各務原市鶴沼字茅場7790ノ1
 各務原市鶴沼宝積寺町3丁目2番
地目 宅地 **地積** 990坪ノ3、272・72㎡
- 土地の変遷**
 大正10年12月27日受付
 1. 稲葉郡鶴沼村字茅場7790番ノ1
 山林 4反5畝10歩ノ1、360坪ノ4、495・888㎡
 昭和38年4月1日変更、昭和53年9月20日登記
 昭和56年4月18日変更、昭和56年4月8日登記
- 昭和20年12月28日受付
 1. 稲葉郡鶴沼町字茅場7790番ノ1
 山林 1町1反8畝27歩ノ3、567坪ノ11、791・788㎡
 (合併により内一部を9539号、9540号より移す)ノ2、179坪
 2. 稲葉郡鶴沼町字茅場7790番ノ1

大正十年(1921)十二月二十七日
 福澤桃介が鶴沼に後に川上別荘
 萬松園となる土地を買った日で、
 電力事業への取り組みの関連を
 考察してみましよう。桃介が電力事
 業に熱い情熱を抱くようになった
 のはいつごろからだったのでしたら
 う。桃介は明治四三年に名古屋電燈
 の常務に、同四年に社長に就任し
 ています。そして時代は大正。
 日本は、大正三年(1914)に第
 一次世界大戦への参戦を決定、日英
 同盟に基づき連合国の船舶護衛
 や兵員輸送に協力、戦勝国として大
 正八年(1919)一月のパリ講話
 会議に臨みました。
 旭日の勢いで工業化を目指す日
 本の電力需要を見越した桃介は大
 正九年に大同電力を新たに設立、大
 正十年十月には、「関西水力電気」と
 「名古屋電燈」を合併し、関西電
 気と社名を変更、翌大正十一年六月
 には朋友松永安左衛門が経営に関
 与していた「九州電燈鉄道」と「関
 西電気」を合併して、「東邦電力」
 とし、日本最大の電力会社を誕生さ
 せました。

山林

3反3畝 \parallel 990坪 \parallel 3, 272.742m²
(分割により他の部分を「6027 \times 76028に移す」)(Δ 2, 577坪)

3. 稲葉郡鶴沼町字茅場7790番ノ1

宅地 3反3畝 \parallel 990坪 \parallel 3, 272.742m²

(山林の地目変更)

※1町(たよ) \parallel 10畝(せ) \parallel 991.7355m²

※1反(たよ) \parallel 10畝(せ) \parallel 300歩(せ) \parallel 300坪(せ) \parallel 991.7355m²

※1畝 \parallel 30歩 \parallel 300坪 \parallel 99.1736m²

※1歩 \parallel 1坪 \parallel 3.3058m²

所有者の変遷

〔稲葉郡鶴沼村南町組〕

大正10年12月27日(売買により所有権移転)

〔福沢 桃介〕

昭和7年8月9日(売買により所有権移転)

〔川上 さだ〕

名古屋市中区東二葉町18番

轉住(昭和18年10月14日)

東京都牛込区市谷河田町17番地(謄本・表示更生)

昭和20年12月28日

売買 昭和20年12月13日

☆売渡證書

昭和20年12月13日

土地売買金額 一萬円 \parallel 2, 672.300円(平成8年)

※貸賃価格 9坪74銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

(990坪 \parallel 3, 272.742m²)

※貸賃価格 118円80銭

山林 稲葉郡鶴沼字茅場7790番2

宅地 稲葉郡鶴沼字茅場7790番1

建物の所在

建物登記簿謄本

稲葉郡鶴沼町字茅場7790
各務原市鶴沼字茅場7790
各務原市鶴沼字横寺町3丁目7790番
各務原市鶴沼字横寺町3丁目82番の1
種別 居宅 構造 木造・瓦葺 二階建て
床面積 1階 131.40坪 二階 6.20坪
1階 434.38m² 2階 20.49m²

昭和38年4月1日変更・昭和53年9月20日登記
昭和56年4月18日変更・昭和56年4月18日登記
昭和56年5月21日変更
昭和59年2月9日生移記



奥に見える樫の水墨画は貞奴の絵の師匠、成木屋洲が71歳のときに描いたもので「木曾桃山飛泉」の銘をもつ。

「この部屋は萬松園の
中でも最も格調の高い
院元の室は「真」と呼
ばれているが、その命名
者は貞奴本人ではなく、
京都ノートルダム女子大
学、島居本幸代教授によ
る最近の発案である。



現在の萬松園建物全景

建物の変遷

昭和20年12月28日

保存登記

(売買のために初めて登記が必要に、それまで未登記)
川土さだ 東京都牛込区市谷河田町1-7番地

売買 昭和20年12月13日

☆先渡證書

昭和20年12月13日 (先渡金額 5万円)

稲葉郡鶴沼町字茅場7790番

建造瓦葺二階住宅

建坪 131坪4合

二階坪 6坪2合

建築年月日 昭和4年4月20日

※貸賃価格 1301円

◆土地売買金額 5万円≡133,611,500円(平成8年)

1円(昭和21年)≡267,23円(平成8年)

〔平成8年の米価を基準に算出〕

〔一〕昭和十五年に貞奴自身が描いた「尾長鶏之図」(稲田大学演劇博物館所蔵)



昭和20年12月28日 移転登記
横山秀 横浜市中区本牧三之谷273番地

売買 昭和31年8月18日

都築紡績株式会社

愛知県知多郡阿久比町大字植大字中郷15番地

平成16年9月24日 現在のオナナである森田満夫・節子夫妻に移転登記



↑萬松園には、こんな洒落た窓をもつ部屋も。窓のむこうは美しい芝生。木立の下方には滔々たる木曾川が、そしてその対岸には犬山城や桃太郎神社を遠望することができる。

貞奴ご遺族 川上新一郎先生と

慶應義塾大学附属研究所道文庫教授でいらつしやる川上新一郎先生にお話ししました。先生は和歌・歌学を専攻されています。伝統的な日本人の魂に深いところで関わっていらっしゃる先生が貞奴の曾孫にあられるということに、格別の感懐をおぼえませんが、今回は昭和二十年の萬松園亮渡証書を軸に据え、よもやまのお話を……。

藤本尚子



萬松園の図録に見入る 川上 初さん。
富司さんのひとり娘であり、川上新一郎
先生の御母堂にあたられます。
貞奴にとって、最愛の孫娘でした。

藤本 昨春、井端瑠美子さんと昭和二十年の萬松園亮渡証書をご提供いただいたのですが、それについて、登記簿本と突き合わせて本物であることを確認しました。その内容をどう見るか、先生のご意見をうかがいたいです。

川上 昭和二十年の萬松園の売却に関わって、実際に動いていたのは貞奴本人ではなく、貞奴の養女富司の婿にあつた広三、つまりわたしの祖父でした。売渡証書の日付、昭和二十年の十二月十三日という、貞奴が亡くなるほぼ一年前ですから、この件に関し、本人が直接、奔走するような体力はもうなかつただろうと考えられます。それでも、署名押印くらいは可能であつたと思います。売渡証書の署名捺印は貞奴本人のものと思われまふ。富司との養子縁組のときの書類で確認しました。

藤本 売買の十五日後である昭和二十年の十二月二十八日付で所有権の移転登記がなされていきました。これによつて、この売渡証書が公文書に呼応した正式なものであることが判明したわけですが、この売渡証書を井端瑠美子さんからご提供いただいた直後は、わたしも半信半疑でした。それまでは、川上家から都築紡績さんに直接、譲られたというのが定説でしたし、その上、この売渡証書の不動産表示の住所が現在の萬松園の所在地、鶴沼寺積寺町ではなく、「福業郡鶴沼町字市場七千七百九拾番の二」となっていたもので、すから、忽然と現れた未知のオーナーさんとその親族の方たちが何か別の物件と勘違いされているのではないかと、いう疑念も皆無ではなかつたのです。まずそれを確かめるために、地名の変遷も皆無であり、同じ場所と間違いないと思われるために、法務局の職員の方には、大汗をかいていたので、遠い昔の登記簿を掘り起こしていただ

藤本 「こゝで登場した譲渡相手の横山秀さんという方は、貞奴さんの足跡を追つている中で、初めて目にしたお名前でした。どういう関係だつたのだろうと訝しく思ひました。井端さんのご意見では、原三溪氏の知人だつたのではないかとのことでした。原三溪氏は横山氏と同じ横浜に暮らしていらつしやいましたが、元は岐阜県丹波郡佐波村（現岐阜市御津町）のお生まれです。彼は政界に名の通つた文化人で、茶人として高名な上、美術全般に造詣が深く古建築の愛好家でもありましたよ。茶人としての松永安左エ門氏・桃介の後継者とも昵懇だつたようですよ。

川上 そのこのころは不明です。祖父の広三が交渉の前面に立つていたということしかわかつていないのです。母の初も、いまは病氣ですし、それ以上のことは……。

藤本 貞奴さんにとって、不本意な売却であつたと人づつていうかがありましたか……。

川上 終戦直後のどさくさでしたからね。母の初も、この件は、あまり話したがりません。都築紡績さんに所有権が移つたときは、ほつとしました。

藤本 貞奴さんにしてみれば、精魂こめて造りあげた貴重な建築物を手放したくないと思ひ、知らない方の手に渡ることに不安を感じておられたのでしようね。きちんと管理していただけたかどうかというのが、貞奴さんの一番の懸念材料だつたのでしようか。でもそれはたぶん杞憂だつたと思ひますよ。横山秀さんというのは、岐阜市で醸造業を営んでおられた方限者の二族です。ご一家の横山さんは地元の政財界に名の通つた大層者でした。その方が今回多大のこ

協力をくださった井端瑠美子さんのお父さんにあたられるわけですが、彼女の話によりますと、萬松園購入の資金を調達したのも、実はこの横山弘さんだつたそうですよ。実際に萬松園を別荘として利用されていたのも、横山弘さんのご家族、つまり井端さんでした。登記上の所有者である横山秀さんは横浜市に在りましたが、藤本に記載された担当権者は、現在も岐阜県の地銀として営業している十六銀行の前身の信用組合だつたことからも、岐阜にお住まいの横山弘さんの尺力、関与があつたことは間違いないと思われまふ。この方々と貞奴さんのご一族に、直接の交流がなかつたことが不安要因になつたのでしようね。

そもそも萬松園は貞奴さんの晩年の集大成といつてよい優れた芸術作品ですから、それを手放したくない思ひはひととおだつたことですよ。そこには何か、やむを得ない事情が介在したと思つて下さるが、井端さんのお話で、ひとつ気にかかりなことがあります。彼女が萬松園で暮らしていた折、玄関の向かつて右側に進駐軍接収の表示があつたというのです。玄関の右側というと、木曽川右岸の狭く風光明媚な土地があるばかりです。当時は後藤別荘をはじめ、主だつた建造物や広い敷地はこゝこゝと接収のターゲットになりましたから、空き家状態の萬松園も、目をうつつけられないはずな名目です。でも、それが結構系疾患をもつ人の療養所という名目で使用されていたれば、これは病院と同じ扱いになるわけで、対象となつて当然です。昭和二十年の萬松園の住人は小児カリエスを患つていた幼い井端瑠美子さん、最近の人だつたのですか……。

それに関して、もうひとつ、最近、現オオサの森田節子さんが貴重なヒアリングをしてくださいました。当時、実際に進駐軍の兵士たちが、萬松園の近辺で大きなパーティをやっていて、近隣住民の方から証言をいただいたと云うのは小見カリエスであるならば、萬松園に進駐軍の食指が動くのは当然の成り行きだつただろう

と思います。居住するには洋館の後藤剛壯で十分だったとしても、兵士たちの遊興の拠点とするのに、木曾川べりの萬松園はあまりにも魅力的ではなかったでしょうか。泳いだり、バーベキューをしたり、ボール遊びをしたり、お花見をしたりできるのですから、近隣の保養スポットとして、目につかないはずはないでしょう。アメリカ人が日本の和の文化を尊重したことを、戦後のわたしたちは知っていますが、終戦直後の被占領民にしてみれば、そこまでの楽観はできず、戦々兢兢だったでしょう。下手をすれば洋風にも改築されてしまわないかという危機意識を募らせ、接収を免れる方便を模索されたことがあっても、おかしくないと思います。すまじや電氣系統の設備万般が行き届いた萬松園であればなさらずです。ま、徳測はこのくらいにして、とにかく萬松園が無事であったよかつたか、いまになっていえるのはそれだけです。ただ、終戦の前後、貞奴さんほどな無いでいらつしやつたのかと……

川上 戦後はすつと熟海の別荘でしたからね。住民票は東京の河田町に籍をのこしたままでしたが……。戦中は萬松園に疎開していたかもしれないですね。

藤本 先生に紹介いただいた貞奴さんの庭にあたる小山つるさんの養女の小山玉起さんはそのよにおつしやつて、いまも使用人を除くと、つるさんと玉起さんの三人暮らしで、若い玉起さんが買出し係だったとかがいまも残っています。こんな優れた建物なのに貞奴さんは、萬松園を最終の棲家とは考えられなかったのですかね。

ところで、貞奴さんがどうして鶴沼に二縁を得たのかと、疑問に思われる方もあるようです。わたしにはよく自然に思われ、どうしてそんな質問が出るのだらうと思議々々らしています。木曾川と貞奴、桃介は一体の存在です。桃介さんがいまの萬松園の土地を買入

ったのです。戦後はすつと熟海の別荘でしたからね。住民票は東京の河田町に籍をのこしたままでしたが……。戦中は萬松園に疎開していたかもしれないですね。

川上 貞奴と桃介はまだ大正の頃に、後々のことを考え、さかんに土地を買つたりしていたのですよ。早くから晩年の備えをしていたようです。

藤本 墓地などの購入もそうなのでしょうが、これも小山玉起さんのお話ですが、多摩霊園の福澤桃介さんのお墓に隣接して、現在の小山家のお墓があると知りました。それも貞奴さんが買つておいてくれたのだと、嬉しそうにおつしやつていました。谷中霊園の可免吉さんのお墓も、やはり彼女が買つておいてくれたのだと、可免吉さんの遺族の浜田聡一朗さんからうかがっています。貞奴という女性は、ほんとうに周りの人に温かい、緻密で周到な方だったのですね。

川上 多摩霊園の件は、貞奴は一時期、桃介の隣に自身が眠るつもりで購入したと聞いています。でも、やはり、それは遠慮したほうがよいと判断して、川上家菩提寺の総持寺のほうに新たに墓地を購入したのです。

藤本 自分の気持ちより、福澤家のみなさんに遠慮され、筋を通す美しい生き方を選ばれたのですね。貞奴さんの、そういう思いがなんとなく伝わってきました。桃介さんのお墓参りに行きまじ折その土を持ち帰りました。貞照寺の貞奴さんご位牌にお供えしたのですよ。首二郎さんのお墓の苔もそぎ取ってきました。これと二を左右に並べ、お供えしました。いまの貞照寺のご霊廟はお花やお線香が絶えないにもかかわらず、なんだかとっても淋しい印

愛犬が病氣になったとき、徹夜で看病したという貞奴、ここで抱いているのは、頭頂部が真白な「ヤッコ」と呼ばれる種類。因みに頭頂部に黒の斑があると「サムライ」と呼ばれる。



手し、登記したのは、大正十年の十二月二十七日（一九二二年）です。ね、八百津発電所ができてから十度、十年後にあたります。八百津から鶴沼まではほんのひと足です。八百津時代にこの土地に目をつけられたのかもしれない。木曾川のさらに下流の景観のよいスポットで、対岸の山頂には桃太郎神社がありましたから、自分の名にちなんで旧跡と絶景のロケーションに、いずれ観光開発をせよ、桃介さんは考え、入手しておいたのだらうと推測できます。彼の事業意欲はとどまるところを知らせませんから。

貞奴さんがその土地を桃介さんから購入し、所有権の移転登記をしたのは、大井ダムなどの一連の事業が一段落してからのことですよ。この土地について、桃介さんから貞奴さんへの所有権移転登記は昭和七年八月九日（一九二三年）となっています。二十も実業家として、金銭的なことは、実にきちんと、クールにけじめをつけていたようです。巷で徳測されるような桃介さんから貞奴さんへの贈与というのはまったくその形跡がありません。プレゼントであれば

象だったのです。二〇一年からは、毎月のお給日に貞奴フオーラムのみなさんにお参りにうかがっています。ご霊廟周辺の落ち葉を拾い、観音様の足元を洗わせていただくくらいのことしかできず、申し訳なく思っております。



晩年の貞奴と桃介について

二人はなによりも、大事業を成し遂げるためのパートナーであった。明治初期の思想・心情を分かちあう同志でもあった。近代合理主義者だった桃介は貞奴の宗教哲学・博愛思想・伝統美への造詣に心酔。人生の喜びといえる少なからぬ要素を貞奴から得た。



横浜市鶴見区に所在する曹洞宗の大本山總持寺にある川上家の墓。墓誌には貞奴の戒名「貞照院孝順至道大姉」の文字も見える。夫の川上音二郎や養女の富司さんとも、ここではいっしょだ。



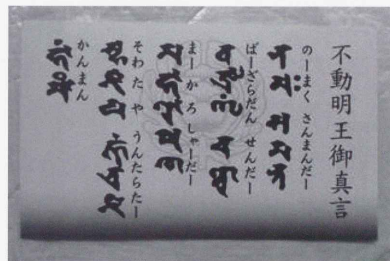
墓地



福澤桃介の墓
多摩霊園



濱田可免吉の墓
谷中霊園



写真が霧につつまれた川上貞奴の墓。においやかな麗人がさ迷い出たような雰囲気の観音像が立つ。どこか貞奴の面差しに似ている。その眼差しの中には萬松園と木曾川が間近に、遠くは大井ダムの方角を見はるかしているようだ。

この霊廟は貞照寺の本堂からやや離れた位置にあるため、訪れる人は多くない。小暗い木立から、音もなく枯葉が降る。背後の山膚を挟んだ、湿った洞に楯は安置されている。左右に右造りの手を従え、本人はいまも程かに呼吸し続けているのではないかと疑わしくなる。

貞奴の音節を思い、成田山の不動明王御真言カードを添えさせていただいた。毎回の祥月命日に、貞奴ファミリーの面々は、落ち葉を拾い、観音像を洗い浄めた後、墓前に参集して、必ずこの御真言を唱えることにしている。

貞奴の本名は「貞」ではなく、「さだ」であった！

川上 さて、お訊ねの貞奴の本名についてですが、戸籍上は確かにこの売買證書の記載と同じ、変体仮名の「さだ」に間違いのないようです。貞奴がわたしの祖母である富司を養女として迎えたときの戸籍簿本の記載も、やはりこの売買證書と同じ仮名の「さだ」となっております。

藤本 登記簿をみますと、あるとき「貞」といふ署名で移転登記しようとしたのを、登記官から補正を要求され、わざわざ「さだ」と訂正している箇所があるのです。添付の印鑑証明と違う表記をしていた場合に、こういう扱いになりますから、公的には「さだ」でないという扱いになることですね。以前、おうかがいしましたように「小山さだ」から「川上さだ」というのが戸籍上の本名の推移と考えていいわけですか。

川上 そういふことです。

萬松園の築年は昭和四年四月二十日

藤本 もうひとつ、売買證書の記載で問題となるのが、萬松園の築年です。「建築年月日昭和四年四月二十日」と、明確に記されているのです。これでも、漠然と昭和八年ごろだろうといわれてきま

たものだったと考えられますが、彼女に対し、ある種の畏怖の念があつて、軽々しく手打しができなかったのかも知れません。

川上 うちは貞奴さんの子孫ということになっていきますが、血はつながっていないのですよ。桃介のほうなんです。祖母の富司は埼玉県東松山吉見町の岩崎家の娘で、岩崎富司といいましたが、貞奴との養子縁組によつて、川上富司となつたのです。桃介の実家は川越のほうの岩崎でした。川越の岩崎家が貧しかったのとは反対に吉見の岩崎家はかなりの資産家で、桃介の実家を援助する立場にありました。その吉見の岩崎家と親しい間柄の親戚に飯野家というのがあつて、その飯野三が富司の夫、つまり、わたしの祖父となつたわけです。ですから、わたしと血を分けた祖先というのはことごとく桃介の側なんです。

藤本 それなら、桃介さんと貞奴さんの間に、たとえ男女として深い関係が存在しなかったとしても、一族に対して面倒見のよかつた桃介さんが一族の子どもの養母としての貞奴さんを支援する理由は十分あつたのだと少なくとも思います。この点は萬松園のオーナーである森田夫人もしきりに強調していらつしやいました。それで、萬松園を建てるるときも、取りあえず、桃介さんの土地を拝借してという形になつたのだらうと、無理なく推論できるのです。でも、根が深僻な女性ですから、そのまますげなうというこゝには、資金面での都合のついた時点で、きちんと売買契約をしたということなのでしょう。貞奴さんのこういう深僻さは随所に見られます。これを歪曲して語つてきた世間のほうを、ひどく汚れたものに感じないではおられません。私達の活動は拙いものですが、彼女の隠れた実像を少しでも浮き彫りにできたらと願つております。

貞奴さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。



左から 貞奴 福澤桃介の孫 福澤桃介

した。建物は横山秀さんに売却するそのときまで未登記だったので、貞照寺の入仏式が昭和八年でしたので、たぶん同じ頃だろうと考えられたことがひとつ、それから成木星洲による佛絵の制作年が昭和八年だったことなどから、この昭和八年説が出てきたようですね。でも、物件を売る側の貞奴さん本人が関与した書類の中で、建築年月日昭和四年四月二十日と明記されているわけです。通常、新しく見かけたほうが物件の価値は高くなるというのに、売り手の側がわざわざ古い方に改竄するというのは、ちよつと考えづらいと思うのですが……。

川上 貞照寺を建立する足場として、ひと足先に宿泊場所を確保したというのはあり得ることです。一人がお寺を建てるというのは実はたいへんなことなんです。単にお金云々だけじゃないです。魔物の権力をまず取得する必要があるんですよ。いかた信仰が厚かつたとはいえ、本人は在家でたから、住職さんの手配も必要でした。信仰という点に関しては、母や祖母は、貞奴は直観力が異様に鋭く、間違いない超能力を備えていたと、よく真顔でいつていたものです。

藤本 それはわたしにも思い当たるふしがあります。亡くなって六十五年を経た今日もお生きています人たちに多大の影響を与えて、われわれを魅了してやまないのですから。わたし自身、貞奴さんの霊にとり憑かれていたような気がしてなりません。生きていらつじやつたころのオーラは凄かつただろうと思いますよ。桃介さんに限らず、政財界の重鎮が彼女に援助を惜しまなかつたのも、その辺りの超能力パワーに起因するからもしれませんね。桃介さんの場合は、自分の身内だった富司さんを貞奴さんの養女にしては獨特ですから、親戚、あるいは肉親のような範疇で、その親しさは独特

貞奴の暮らした場所



左は東京日本橋葺町界隈を描いた山本松谷の絵である。貞奴は明治4年の出生から約20年間をこの地で過ごした。残念ながら、実家の越前屋も芸妓置屋も、この絵からはうかがい知ることはできない。

下の写真は明治11年と同16年の古写真である。三枚の画像から東京が急ピッチで発展した様子がわかる。明治24年からは住吉町の新居に移り、夫の川上音二郎と暮らした。



閑静な木立に包まれた茅ヶ崎の和洋折衷の川上邸を、萬松園と名付けたのは伊藤博文である。松嶺と潮騒、演劇の未来を語る熱っぽい議論そんな環境下で貞奴は女優としての日本デビューに一步を踏み出すこととなった。茅ヶ崎の浜の、颯々とした風と鋭いつつ、清んだ声をしぼる貞奴。この地は女優としての資質に磨きをかける道場となった。



明治34年、欧米巡業を終え、日本に帰った音二郎・貞奴夫妻は、以前より親交の厚かった九世團十郎の住む茅ヶ崎に、身を落ち着けることにした。茅ヶ崎の自宅前という上の集合写真は何の記念だったのだろうか。

都築紡績時代の川上別荘「萬松園」

榎野孝子

私が初めて岐阜県各務原市鶴沼の川上別荘「萬松園」を訪れたのは十年程前になるうかと思えます。日本の女優第一号として知られる川上貞奴が自費で建立した「金剛山桃光院真照寺」の向かい側にその建築物は所在しておりまし。

当時は都築紡績(株)の所有で未公開の建物でしたが縁あって訪問することができました。管理人の奥村御夫妻の案内で室内へ通された時の感動は今でもはっきりと脳裏に刻まれています。

表玄関を入ると桐の間に呼ばれる客間の上段床には昭和天皇の侍従長であられた入江相政氏直筆の三福の軸が掛けられ、床の間の脇には木曾川沿いの寝覚めの床や、桃の滝と呼ばれる桃山発電所の奥には木曾川沿いの寝覚めの床や、桃の滝と呼ばれる桃山発電所の余水を流す滝す貞奴の絵の先生と言われる成木星州画伯によって墨絵で描かれていました。

仏間の天井には色鮮やかな飛天が描かれ、黒漆に螺鈿を施した仏壇がそして板戸には金泥で菩提樹が、壁の下張りには紺紙に金泥の襷が、煩悩を表す一〇八匹の行列をつくっている様が描かれています。(紺紙金字の経本は最高の経本と言われているので?) 栗の間はすべて栗の木で造られ、床や板壁が手斧(ジョウナ)彫りで施され、壁土には種々の束がそのままの形で塗り込められているのが印象的でした。その他の部屋もそれぞれ意匠を凝らした裝飾が目を見舞い、ある部屋は壁の目の太さが大小に分かれていたのが思い

出されます。

又、サンルームは床がタイル貼りで、外に向かうドアはステンドグラス製でガラス枠は鉛で組んでありますが、非常に高度な技術を要するため、今日では修復不能と言われています。

部屋敷にして25部屋！その一部屋、一部屋が趣の違う雰囲気や圧迫されたのを覚えています。

その後の「萬松園」は管理人の方も去り、一時は閉め切ったままの状態であることを聞き及びました。機会を得て私の属しているボランティアの方々と弁当や掃除機を持参して掃除に度々伺ったことも今は懐かしく思います。

(仏間天井の迦陵頻伽)



現在は創生館の森田御夫妻の所有になり、ご一族が運営されている結婚式場「サクラヒルズ川上別荘」の管理もとで再び私どもの目にふれる状況となっております。

往時を忍びながら、度々「萬松園」を訪問させていただきます。

女優引退後の貞奴



貞奴が女優引退を宣言したのは大正六年、四六歳のときでした。翌七年に名古屋に川上絹布株式会社を設立し、名古屋の東二葉町に和室付きの洋館を建て、そこを本拠地としました。上の写真は、大正九年の竣工当時の二葉御殿です。住居というより、電力事業を成功させるための接待場、ミ鹿鳴館の赴きでした。その主宰者として、政財界要人や外国の賓客などを迎え、着飾りながら接待で桃介の事業を側面サポート。女性実業家としての手腕も、もうひとつの写真は自転車に乗ろうとしている福澤桃介をとらえたものです。背後の建物はダム建設の拠点となった南木曾の桃介の住居です。ここにも国の内外から多くの技術者や観察者が訪れました。その都度、器用で別な接客役をこなしたのが、やはり貞奴でした。現在の交通事情でさえ、時間以上かかる南木曾の現地で、名古屋の二葉館の間を、彼女は精力的に動きまわり、まさに八面六臂の活躍ぶりでした。

二葉御殿の変遷

慎野孝子

「二葉御殿」と呼ばれた邸宅が大正時代に「名古屋市東区東二葉町」（現名古屋市東区白鵞3丁目）に存在しました。
尾張藩時代の、この界隈は中級武士の屋敷が建ち並んでいました。「東二葉町」の名は明治初期に付けられ、昭和55年まで用いられてきました。この地は名古屋の東に位置し、名古屋台地の北端にあたり、遠くは伊吹山や、大曾の山々などが眺望できたであろう高台を形成しております。

貞奴と桃介が暮らした「二葉御殿」とはどういう役割を果たしていたのでしょうか。
当時、桃介は木曾川流域に水力発電所を建設するための拠点が必要でしたから、中部政財界の人達や地元の人達を接待する社交の場として、この建物を活用したのです。連日華やかな宴を繰り広げていましたが、そうした折、貞奴は国際女優として培った西欧流の社交術で、桃介の良きパートナーとして、並み居る人士を魅了していたにちがいないかもしれません！

「二葉御殿」が建てられた「東二葉町」はもと土族の竹腰四左衛門の中屋敷で、大正期には京町に住んでいた薬種問屋の中北伊助の所有地でした。貞奴はこの中北伊助の所有地と西隣の敷地を購入して、「二葉御殿」を建設したのです。番の鑑測で、福澤桃介から与えられたかのような謄見もあるのですが、それは間違いです。

大正6年（1917） 9月21日
東二葉町19番 20番を中北伊助より購入（1307.60坪）
大正8年（1919） 11月29日
東二葉町21番を名古屋土地（株）より購入（658.03坪）
合計 1965.63坪
大正9年（1920） 9月 「二葉御殿」竣工

その後の「二葉御殿」

昭和12年（1937） 6月28日
敷地の西側の一角を除いた跡地を分割して川崎舎恒三（大同電気製鋼所常務）に売却（646.43坪）
昭和32年（1957） 7月10日
大同製鋼（株）へ譲渡 ↓ 二葉荘を寮として利用（580.00坪）

「二葉御殿」は日本の女優第1号と言われる川上貞奴と電力王と言われた福澤桃介が大正9年〜15年まで共に暮らした邸宅です。敷地2000坪、建坪1800坪のオレンジ色の屋根瓦の洋館とそれに続く和館との和洋折衷様式であり、夜になると屋根のサテライトが庭を照らし、部屋の灯りが豪華なステンドグラスを透して外に漏れ、エキゾチックな夢をかきたてていました。その様を見た辺りの人々から「二葉御殿」と呼ばれるようになりました。

昭和45年（1970）5月22日
大同製鋼不動産（株）に所有権
平成2年（1990）2月21日
（株）大同ライフサービスに名義人表示変更
平成12年（2000）

老朽化のため解体、跡地は駐車場として今日に至っています。
売却されずに残った「二葉御殿」の跡地

昭和13年（1938）9月26日
川上貞奴から養子の川上広三に所有権移転
昭和27年（1952）
すべてを分譲、売却されました。

平成17年2月8日、名古屋市長権木村に「文化のみら二葉館」として創建当時の「二葉御殿」が名古屋市の所有建造物として復元されました。
そして毎年2月8日は「二葉の日」としていろいろなイベントが催され、市民に親しまれる場となっています。

※ 参考 「旧川上貞奴邸復元工事報告書」



桃介と貞奴

仲谷甚作

音二郎と死別した後の貞奴について、長谷川時雨は次のように述べている。

「さかぬ気の強い、やや権高い令夫人ぶり」一異国の女性にふんした時の貞奴のほうがよほど美しく貞奴らしい。「貞奴の楽屋に行く」と桃介がいた。桃介がお茶漬が食べたといえは、小さな茶碗に盛って頂くと、かと思ふと、桃介に「早くよの晩豆(えんどう)を買って頂きましょう。だい、塩煎(いり)よ」といふ。貞奴の子のようなところがあった。「二人は、たあいな、ままごこのような新夫婦か、夢のような恋人同士か情人同士のようであった。」「貞奴の声は柔らかくあまく響いていた。」

桃介は、長谷川時雨にそれとなく「ねえ、僕が川上の世話を焼きすぎるといつて心配したり、あれこれ言うものがあるけれど、男が女に惚れているに限ると思うので、女が男に惚れ込んで御覧なさい。これは大変なことになる。男が惚れる分には、女の望みのダイヤモンド、着物、おつきあい、そのうえ家を買わぐらいのものだからと語つたそうである。事業家の恋愛とは妙な原則があるものだ」と長谷川時雨は感じいったとのこと。そして、こんな悲しい、貧しい恋愛で、満足している男女が実に気の毒なものと思つた」とも

しかし、事實は、一般に誤解されてきたような形とはいささか違つていたようだ。貞奴は自立した女で、桃介が経済的な援助を受けることを潔しとしない。株の売買については、指南をうけるらしいことはあつたという程度だ。これは、はつきりした桃介の言葉としてのこされている。桃介はそのように不名誉な誤解を受けた貞奴を気の毒に思い、なんとかして世間に眞実を知らしめたいと苦慮したが、スキャンダルを好む世間の趨勢に、同じ土俵で闘う愚を避けたいと願う賢さもあつて、ほろ苦い思いを扱いかねていたよう

この二人の愛の本質とはどのようなものであつたのだろう。衆目が見る通り、桃介は、彼女の美貌と才知と反骨精神を受たてであらうし、貞奴も桃介の複雑性、事業意欲に魅力を感じたに違いない。しかし、二人は第三者に自分たちのことについて、多くは語らなかつた。そこがわれわれは目を凝らさなければならぬ。二人は言葉では語らなかつたが、態度をもつて、後世に大きなものを伝えた。木曾川流域の発電所然り。二葉館という近代建築然り。貞照寺の建立然り。川上別荘萬松園の造営然りである。どの一つをとってみても、人ひとりが一生の間になし得る仕事屋を遙かに凌駕している。二人の愛のエネルギがこのようにドラマチックな生産性をもたらしたといふことを、きちんと評価しなければならぬ。

二人のために世界があつたのではなく、日本のために二人の愛があつたといつて過言ではない。よつて今日のわたしたちは、二人の愛に、敬虔な感謝を捧げなければならぬ。特に日、日本の電力事業に関与する人たちは、おそらく、わたしと同じ考えであろうと確信している。

〔参考〕長谷川時雨「ダム貞奴」(新編 近代美人伝(上)) 岩波
日本経済新聞平成元年十二月二七日、二〇〇世紀 日本の経済人

いう。「感情、感覺、全神経を打ち込んだ男女恋愛のどん底は魂の交感であり、命の掴みあいである。死と生がそこにあるばかりで何物をも交えるこの出来ない絶対のものであらねばならぬ」とのが時雨の主張である。「けれども二人(桃介、貞奴)は、愛するとははわなかつた惚れたという普通軽しいはなされる言葉を使つた。そこにこの人の用意があるのかもしれない」と時雨は結論づけている。

桃介といえは、川上貞奴との公然たる愛人関係が有名だ。確かに二葉館で同居していたのだから、そのように見るのが自然ともいえた。しかし、これは木曾川にダムを築くという大事業のため、その拠点として企図されたという事情を、第一義的な目的として見なければならぬ。この桃介の思い切つた行動について、桃介の養子コンプレックスのなせる業という見解があるが、それにも一理ある。房子夫人が桃介に対して冷淡で、桃介の客がきても茶の一杯も出さうとはせず、別棟で知らぬ顔をしていたそうであるから、日本が初のダム水力発電という未曾有の事業に取り組もうとしていた桃介にとつて、不可欠ともいえる内助を、妻に期待することができなかったという悲哀が、事實となつてあつたらただ、そこで桃介は貞奴の援助を求めなかつたのだが、それが愛人説として通俗的のみ、語られてしまった。

長谷川時雨(明治二年、昭和十六年)

貞奴にもっと迫り時と場所を生きた先駆的な女性文筆家である。貞奴に遅れること八年、貞奴と同じ東京日本橋に生まれ、できたての小学校で読み書きを習つた。伝統的な女性の教育として、茶華道などを身につけたが、唱、踊りを習い、芝居見物にも足をそとんだというから、貞奴との共通点は多い。小説、戯曲などの創作のほか、新聞や雑誌を発行し、女性の地位向上に尽力した活動家としても知られている。

貞奴について、一番の理解者のように思われがちだが、作家にありがちな想像力が仇になり、貞奴の周到な策略術を翻弄され、火花を散らした面もろがえることから、貞奴の本質を捕捉し得たとはいえないのではないか、……というのが貞奴フロラムでの評価であつた。



貞奴という奇蹟

藤本尚子

1

貞奴が本格的に世界の繪舞台に登場したのは一九〇〇年のパリ万博からと見るのが妥当であろう。それに先立ちアメリカ公演では新奇性が耳目を集めるといふことはあつたとしても、真の芸術批評の対象として、喝采を得たとは言ひ難い。一九〇〇年といへば、明治政府が生誕して節目の三十年を越えたところであり、場所は世界文化の中心、花のبار、それも最先端の文物がたぎらびやかに競いあつた万国博覧会の会場である。あらゆるジャンル、前衛アーティストが集うパリのサロンが当時、如何に恐ろしい存続を争つたか、それをまず前提として考えないといけない。近き諸国で名声を得ていた芸術家が一朝、パリに出た途端、陳腐の烙印を押され、一夜にしてその作品がゴミ扱ひになることもあれば、無名の新人がいきなり「天才」の冠を得て、時代の寵児として、もてはやされることもあつた。鋭い批評眼が燦集し、狙上すべし新しい獲物を手ぐすねひいて待ち構えている魅惑の蜘蛛の巣、それがパリの芸術サロンであつた。決して其な珍しきだけで勝負できるような甘い土俵ではなかつた。技術的洗練はほんの入り口にすぎなかつた。何世紀にもわたるシリヤスな芸術の累積の上に、鮮度の高い新しい血の導入を絶えず求め続ける食欲な芸術都市、それがパリであつた。爛熟し、飽

いるが、それはどのような手順によるものであつたか。

「日本」と「パリ」が遭遇したのは一九〇〇年が初めてではなかつた。一八七七年の第一回パリ万博に、江戸幕府と薩摩藩が既に出品しており、ヨーロッパ人はこのとき、大量の質のよい日本の伝統工芸に接している。先に述べた「アール・ヌーヴ」のサミュエル・ビングも、もちろん日本美術の愛好家であつた。アール・ヌーヴはたしかに欧州を席捲するモードではあつたが、本當の意味でパリの文人たちが魅えていたのはこれらの装飾やデザイン、奥に眠る思想、美意識の原動力となつた哲学ではなかつたであろうか。

ちなみに、よくひきあいに出されるゴッホの「ダンギー爺さん」なる作品が描かれたのは一八七七年、パリでのことであるが、同年のゴッホは広重や栄楽を直接模した作品なども発表している。しかしゴッホがアール・ヌーヴの画家として意識されることはあまりない。アール・ヌーヴの巨匠と目されるのは、女優サラ・ベルナルのポスターを描いたテオのミュシャ（一八六〇—一九三九）や、麻糸の手法、金箔を用いた絵で知られるウイーンのクリムト（一八六二—一九一八）などだ。クリムトになると、耽美と退廃、死への誘惑が色濃く濃く、アール・ヌーヴ、アール・デコと称される軽いはずのモードに妖しげな奥行きが発生する。そこだ！ここまできて漸く、ヨーロッパの芸術思潮と貞奴の舞踊の接点を見いだすことができるのだ。

官能的で妖艶にして滅びにいたるほどの凄絶、これを名付けるとすれば、「死に至る美」あるいは「美の極限としての死」とでも表すしかない。表現主義の一番奥深いところに眠っていた未知の、かつ禁断の思想が突如として現前したのである。これが貞奴の道成寺

きられたものに代わる、次なる前衛を探すすべしつこい視線が錯綜する街路、それがパリであつた。それでいながら、個々のエポックの代表作へ、それがはらひ統ける真贋さもちあわせているところが素晴らしい。真の芸術的伝統とはこのようなものである。ここで認知されたものが世界に拡散していき、まさに批評の王国、競いこそがその都市の真骨頂ではなかつたであろうか。

では当時、パリで話題をさらつて「新しい血」とは何であつたのだろう。一八九五年、ドイツ出身の美術商サミュエル・ビングがパリで「アール・ヌーヴ」という看板の店を開いた。これがそのまま芸術思潮を表す名前となつたのである。その店には、ティファニー、ガレ、ミュシャなどの工芸品が飾られ、日常の途に供せられる品々の装飾性、デザインといったものが、本家ともいふべき絵画の根底をゆさぶつていた。本家の芸術思潮の流れからいうと、ポスト印象派から表現主義への移行期にあつて、装飾を目的としたデザインの場合で斬新な切り口が、スワイズのような役割を果たして始めていたのもいへばよいだろうか。このうねりはいつ、どこから発祥したのであろう。日本の浮世絵などがそれに関わつていたら

に、パリが熱狂した本當の理由ではなかつたか、長々とらされた破句、人々はやつと答えに巡りあつたのだ。この予想外の出来事に彼らが狂喜し、夢中になつたのはいうまでもない。この時宜になつた「遭遇」を、おかしき奇蹟と呼ぶのである。パリという社会の批評的成熟がなければ、とうい貞奴への理解は期待しえなかつたであろうし、また、表現主義の深甚な淵が日本文化と通底するという発見もあり得なかつたであろう。

甘美なるかな、死への誘惑、貞奴のそれはしかし、類型的なそれではなく、明い、未来を予感させるホジティブな何かであつた。日本の美意識にとつて、死は破滅ではなく生の完成である。よつてそれは輝かしくめくらおねほならぬ。生への執着こそが醜悪とされる。陽光にきらめく白刃の緊と響きあう存在理由、艶かしさの極致の裏振りが死であるような美意識。それは陰險破滅とは正反對の清明で真っ白な境地である。この浄化のプロセスを貞奴の芸によつてたどつたことに、鑑賞者たちは、はつきりといは交付していなかつた。しかし、この稀有なるもの、名状しがたい何かを、漠然とはあるにせよ、感受したパリの敏い感性を稱賛せずにはいられぬ。

レスリー・タウナーは「批評家たちは何よりもまず、貞奴の死の場面で持つ圧倒的なリアリズムに驚かされた」と述べ、辛辣な批評で周りをふるえあがらせていたアンドレ・ジイドでさえ、貞奴を激賞し、六度も彼女を裸に足を運んだと伝えている。モダン・パレの創始者イサドラ・ダンカン然り、ピカソやロダンのような美術関係者然り、ドビュッシーやプッチーニの音楽関係者然りである。ただ、彼らの感銘の質について、彼ら自身が明確にそれと認識し尽くしたわけではなく、珍しい風俗や芸能上の技法に勾引され、分析のナイフを途中で折られたまま、懐にしまつてしまひ、ただただ恍惚と貞奴

に見惚れてしまったというのが実情ではないだろうか。このことが貞奴へのその後の評価を曖昧なものにした。

残念なことにこの貞奴への評価を、金剛石をガラスと同一視するに似た低俗杜撰な批評が汚し続けてきた。いわく、貞奴・音二郎は折からの日本ブームに要領士々便乗しただけとする類いがそれである。レスリー・ダウナーの貞奴への視線は、この危うい境界線上をさま迷いつつも、正しい認識への道をひらいてくれた。名だたるパリの芸術家たちの貞奴への賞賛を克明に伝えてくれたからである。これは、貞奴を不当に過小評価、いや、誹謗すられた日本批判の誤り、狭くは、貞奴を、ひいては明治の日本人論についてさらした日本文化そのものの真面目なおす導火線の役割を果たしたといえる。広くは、洋の東西の異質な芸術思潮、哲学、美意識について、比較研究の必要性を喚起し、かつ人間存在にとつて共通の形而上的諸問題を鮮明にするという作用をなした。

2

貞奴という奇蹟、そう呼ぶ所以は舞台の外にもあった。一歩、舞台をおり、役と人を離れると、ファンをがっかりさせるような凡庸な佇まいを見せる俳優もいるが、貞奴の場合はそれは違っていたようだ。かといって、緊張して固くなってはいたわけでも、おどおどしてはいたわけでもない。なんら臆することもない、常に堂々と王侯貴族とわたりあつた。これもまた、奇蹟といえないだろうか。ともすれば東洋の野蛮国の猿と侮られかねない環境下にもかかわらず、その種の差別意識を喚起する隙を微塵も与えず、気品に充ちた態度で、西歐最上級のサロンを圧すことには成功した。いま世界に、まっとうに認知されたのではない。一か所だけ研ぎ澄まされたセンスでもって、観

者「心」と呼ばれる手数料をとつて、金貨と銀貨、あるいは銀貨と銅貨の交換を行つた。の面替商にも格の上下があつた。金融業務全般を行つた本面替と、小判、丁銀、銅銭のすべてを面替を行う三組両替、銅銭の売買に限定される番組面替の三種があり、本面替以外は質屋などを兼業する場合が多かつた。本面替ともなり、為替、手形、預金、貸付などの業務を執りおこなない、諸藩の江戸屋敷と国許の異なる経済体制に併介的に関与して、藩財政をゆるがすほどの主導権をにぎることがあつた。その最たるものが大名貸といふ、本邦一の金融資産家といへば、大坂の鴻池、江戸の越後屋(三井財閥)があげられる。彼らが中心となり、武士階級が手も出ないような、欧米にも類をみないほど高度に近代的な金融システムをつくりあげていた。彼らはいわば大名を王玉にとるほどの存在であつたから、面替商の株を持つことは格別なことであつた。表向きは土農工商の階級制を超えた分限者たちだつたといつて過言ではない。

規模はともかくとして、貞奴の実家、越前屋も、日本橋に店を構えていたほどであるから、相当な権威を有していたにちがいない。その上、本面替の「お譲様」という記号を背負つて、貧しい農村の少女たちが身売りしてゆくような世界に、前後のいきさつはともかくとして、最終的には、自ら好んで飛び込んでいった少女が実在したという、これもまた奇蹟といわざるをえない。幼いながらも、芸能への欲求、衝動といったものを、本能として感じ取つていた七つの子、彼女、芸を仕込むのに最高の素材が最高の環境を選びつたこと、驚愕の目をみはる。大人顔負けの鋭敏で早熟な子どもが、自分分は周りの子たちとは違ふのだ、強い信念と自負をもつて、ひととお敵しい視線の中で、「芸」を磨き上げていくのである。コアをなす情熱とたゆまず修練、優れた指導のすべてがそろつたとき初めて連することができる。「洗練」の極というものがあつた、それが

然とした振る舞いに終始した。それを可能にした精神的な土台について、ダウナーは、「日本橋越前屋のお嬢さん」という特別な記号に彩られた絶対的自負、優位性の自覚であつたのだと指摘する。そこをひとつくために、ダウナーは貞奴の一族の歴史から筆をおこしている。

貞奴の一族の物語を考えると、彼女の父親小山久次郎の出自はあまり問題にされないようだ。農村の出身であるという一事実が語られ続けているのみである。それに反し、常に強調的に取りあげられるのは、母親である多可の実家である。これには大きな理由がある。貞奴という奇蹟を可能にした最初の萌芽が実はそこにあつたのであるからである。多可の生家が小熊という姓を許された日本橋の越前屋という面替商であつたこと、ダウナーはこのほか、重要視している。そこに異論はないが、日本に足場を設けることのできるわれわれは、より深く、事情を考察できるはずである。

時代を少しさかのぼつてみよう。江戸時代の封建体制において、それもまさにその体制が崩れようとしていた矢先において、商品経済の発達が米本位経済の武士の生活基盤をゆるがし、幕藩体制を内側から破壊しようとしていた圧力下において、この国では、世界でも初めてという先物取引、ならびに信用取引が活発に行われていたのであるから、それ自体、驚きである。大坂の蔵前と共に、大江戸の面替商というものもがどれほどの權威性を持つていたか、まずはそこに目を凝らしてみよう。

江戸期の日本の貨幣制度は複雑きまわりなく、金銀銅の三種の貨幣が流通していた。そのそれぞれの交換レートが物価と、変動相場制であり、それらの貨幣とは別に、米の相場が諸物価との交換価値レートを形成するといふ重層性を有していた。面替商は切貨(きり)を唄き、奔放なパリの露を震感させたのだ。パリのサロンもまた、真贋を唄きかける批評眼において、洗練の極にあつたからである。

3

貞奴自身が芸妓としての運命に納得していたというのは大切なことである。なぜなら、そこには卑屈さが棲みつく余地が微塵もないからである。悠々と天空を泳ぐような快活さがあるばかりである。そこをダウナーは読み違えてると思えてならない。悲惨な境遇を生きたかわいそうな女と見てしまつた途端に、貞奴の本質はするりと服け落ちてしまう。安撫のお涙からようたの身のう話を捏造するしかなくなつてしまつたからだ。貞奴の「選族がこのダウナーの名著に好し、どうしても納得できなかったという理由もそこであつた。

ダウナーは貞奴の「芸者」という身分に抑圧の要素しかみなかった。その見方は、日本の中の多くの偏見にみちた誤謬たちとも、ものの見事に呼応してしまふ。結果、何か違つて感じつも、どうすれば真実を浮き彫りにできるかと、戯作者さへも、途方に暮れてしまふのである。芸者といふ、美しき動く芸術作品を棲息する環境には、確かに社会的な「抑圧」が、あまりにも明らか実在したからである。

間違ひはどこで起つてしまふのか。貞奴自身がその種の抑圧に呻吟したにちがいないと憶測するところから狂つてしまふのだ。そうではない、彼女がむしろ、その世界とその世界を外から見る人々の目を、冷めた理性で観察したので、その上で、外、すなわち世間の人々の、ものごとを理解する能力に限界を感じたのだ。時には反論し、説得しようとしてみても試みもした。それが徒勞に終わるば

かりか、逆効果になりかねないことを体験もし、養母の可免吉に教
え諭されもしただろう。そして、失望し、諦めたかというそうでは
ない。そこが彼女の非凡なところである。自棄になる代わりに、
わからずや達の誤謬もたらす弊害をどうすれば最小限にとどめ
られるかと、その対策を工夫した。それが計算ずくの発言を生むの
であるが、そこをまた、凡人の浅知恵が間違った方向に深読みする
という二重の誤謬が発生する素因となつてしまった。水原光の女一
般の習性を適用して解説しようとするから間違つたのである。そこ
にありがちな狡い陥穽のように決めつける凡庸な手合いに、ほとほと
愛想が尽き、うんざりし、もう口もききたくないと思つたことであ
らう。しかし、彼女はどこまでも無垢な人であつた。長谷川時雨も、
貞奴の天性の遺伝的美質として、優雅、貞雅、無邪気、一本気とい
つた要素を認めているではないか。よし可免吉から、任侠、啖呵、
婆娑つ氣を学んだにしても、それによつて生来の氣質がそこなわれ
たわけではない。これをたと見込んだ男を疑わず、一途にその成功を
信じ、支え、尽くし抜いた。それが彼女の生きがいであつた。この
無欲、この純真無垢に、ミュージズが憑依し、七つめの海を超えて、類
似の魂をもつ世界の人々を惹きつけたのだ。

この貞奴の純粋性について、ダウナーの引用した、一九〇二年四
月のコッリエレ・デッラ・セラ誌の記事は、ある程度、正鵠を射て
いる。「彼女の魅力は幼子のそれである」と……「なにしろ西
欧の女優というところ、コケツトが過多であるところが多いので、清純な
愛らしさが、男たちを清潔なプラトニックラブに目覚めさせたとい
うこともあり得ないことはない。ダウナーがさらに、「ピカ
ソは、その人形のような姿の背後に、力強い情熱的な女性を感じて、
り彼女の死の場面における過剰な激しさを強調した」と述べている
ことに、信憑性がないわけでもない。が、これらは貞奴の真価を、

「謎」だといっているに等しい。

貞奴が表現したものは、それはいい何だったのだろう。人が生
きるという事は悲しい。人を愛するということとは切ない。人生は
報われない荆の道歩むに似ている。身を捨ててこそ浮かぶ瀬にめ
ぐり逢える。だからこそ、無欲と厭身に生きる。一心不乱に生きる。
それしかないではないか。そう観念した位置で、自己の完全燃焼を
志す。そうだ、それこそが貞奴の表現の真髓なのだ。

晩年の貞奴は、彼女の純真さを理解していたすべての人々に先立
たれた孤愁を否認しない。また、無神経に涙を投げつける嫉妬の鬼た
ちが跋扈するこの世を、まさに穢土であると観念せざるをえなかつ
ただろう。しかし、その留息は、宗教の力によつて、蔽われるとい
う構造をもっていた。であるから、人は敢えて言及しようとしてい
ないのだが、貞奴の内面において、宗教は衆人の予想をはるかに超えて、
重篤な基盤を占めており、死してなお、救いとは何かという本質を、
われわれに説き聞かせようとしている。

少し先走りすぎたようだ。信仰の問題は将来の課題とし、まずは、
貞奴という奇蹟を可能にした取りの要素、芸術と、まず以上に出以上に重要
だったもうひとつの要素をも取り上げねばならない。日本を祖国と
するわれわれは、そこをどうしても開却するわけにはいかないのだ。
「近代の洗礼、日本人の精神革命、新旧思想の葛藤などがそれだ」
が、残念ながら、こゝでの紙幅は尽きたので、「貞奴と近代」は次
号に譲ることにしよう。

参考 レズリー・ダウナー著・木村英明訳

「マダム貞奴 世界に舞つた芸者」二〇〇七年一〇月集英社

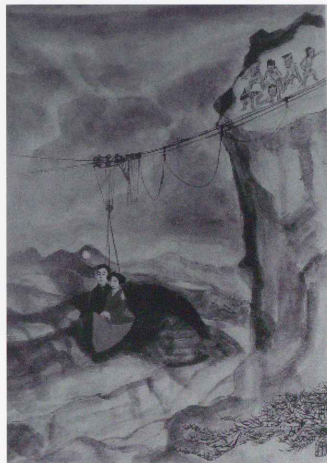


水鏡が豊富でダムを通した内配をもつ大曾水系、
ここ舞台に水力発電の大ブロンクレストと着手した
福澤介前入表路の大事業に取り組む勇を精神
的に交えたのが貞奴だった。目的に向かつて常にま
ついで懼れを知らない女性であった。

一六井ダムの建設現場



命を賭ける



工事の初期、右の絵のように、單龍につるされ、機分と貞奴は絶壁から谷底に下りる
というパフォーマンスを演じた。機材などを運びおろす必要があったのだが、現場はあ
まりにも険で、恐ろしい奈落が眼下で口を開けていた。大抵の工用用品をおろして
いた谷底を、とにかく責任者自身の足で踏査することが求められた。随行すべき役員た
ちは怪しげなロープに吊り下げられ、下りていくのを躊躇した。その不甲斐なき土工
たちが白眼視するのに気付いた貞奴は、女の身にもかかわらず、その危険な乗り物にさ
つさと乗り込んだ。今日も電力業界で伝説的に語りつがれている「エピソード」だ。
彼女のこのような勇氣はこれから来たのだろうか、これほどまでに心身を制する術
を、いつの時点で身につけたのだろうか、信如心というだけでは現代の人々にはわかり
づらいだろう。脚本を併せていこうなら、宗教の深奥にある死生観、連観というにわり
だろう。これが、しばしば希望を可能にした。嵐の海を小舟で乗り切ったり、ほとん
ど一貫でアメリカを迷ったり、そんな冒険の数々が物事に動じない沈着な魂を具へた
のだろうか、それとも、むしろ、天性の冒険だつたと見るべきだろうか、潔く美しい冒
険心に、喝采をおくずにはいられない。舞台をおいても彼女が魂のスターだった。

槍は錆びても

野暮と粹について

江尻勝典

「やりは―さび―ても―なは―さび―ぬ」

貞奴の美しい声調は、身を澄まして聴くと、この世のものとは思え
ない、神秘的な凄麗さがある。聴き惚れるほどに、体の深層から感動が込
み上げ、涙がでてしまう。
聴き惚れていると、共に睦まじく過ごしているかのような錯覚に捉
われる。そこで、貞奴について考えてみる。仄聞するところにより思
うに、貞奴はこよなく世に惚れぬいた稀有な人のようだ。そこで、
槍さびの件にある種な文句を平地に貞奴の実像の一面を考察してみ
た。

世には野暮が矢鱈と多い。その野暮をかわし損ねると、張り合うこと
になり、自分も野暮に陥ってしまう。そこで穏やかに意図を張らず無
理を通さず、粹に「な―く―さず―やか―さず」と、洒落て宥めて馴ら
す。これが貞奴にして備わる寛容なのか、または仏心の融れか、心を
澄まして考えてみると、無理に眩さす義を以って礼節で馴らすがよし
ということになる。貞奴は十二支のひびく歳と聞く、羊の下に我と書
いて「歳」となる。身罷る間際に「見守っていますよ」と、言い残し
て二期を終わつたと聞か、あれは、世に義を論す言葉であったのか

と、なるほどと思う。世は昔も今も義に疎い。

つくづく思うに世に稀な人だ。ヨーロッパでは在りし日、国の帝位
にある者から芸術文化に於ける極東の巨星と仰がれ、祖国では政財界
の人物にモテテ、知れば知るほど目が眩む。つまり、貞奴は、日本の
一粹”を世界に示したわけだ。自身の生き方に於いても、粹の中の粹
を買き通した人であり、まさに、「槍は錆びても……」の典型で
あったといえる。

やが、余談めくが、平成二三年桜田麻の北上も終わり、山々が若い
青葉に耀くころ、貞奴生誕一四〇年を記念して、創作オペラ「貞奴―
第一部青嵐篇が貞奴ゆかりの地で上演された。オペラは大盛況で、ど
ても素人混じりの市民オペラとは思えない質の高いものであった。

貞奴の幼年期、少女期を演じた二人は、さながら貞奴の霊が降臨し
たかと思われるほどリアルで、はまり役の印象があった。粹というの
とは少し違うかも知れないが、貞奴のいさずな性格がよく現れている、
感動的であつた。粹というなら、貞奴を育てた芸者置屋の主、可免吉
役がその典型だろう。プロの大家役でも、あそこまで粹に、しかもユ
ーモラスな人の好きを表現し得たのだろうか、疑問に思うほど、素晴



らしい演技力であった。この可免吉少女貞奴の、強心の結びつき、会場ははなみりして、涙を流す人も少なくなかった。原作に忠実な名演出と演技力であったが、冒頭で驚かすことができた。その他、音二役もなかなかの男ぶりがあって、音頭に登場した、ほんのちよい後の女将役ですら、目を眩るばかりに替な着物の着こなしを見せてくれた。老車夫の楽しい掛け合い漫才など、吉本興業より品があつて、特の要素は至るところに散りばめられていた。

音的には、ちよつと意識すぎずではなかつたかと思はれるほど、ピアノの絶技巧を通つたらしい形跡がみられた。それを無理なく弾きこなしていたのは賞賛に値するが、見方によつては、こいつう、この詳細は二分されるかもしれない。

ともすると、作曲家あるいは演奏家の自我が際立ちすぎることで、舞台の仮構性がほころびてしまつたこともあり得るからだ。絵でも演奏でも、技術力の誇示に流れとたんに、けれども味が出てしまつたので、わたし自身は絵を描くとき、強く自らを戒めているところもある。粹を狙つて野暮に臨むのはよくあることである。オペラからく無私の境地がよいと確信している。

作曲そのものについていえば、オペラの原産国の旋律に近づけようと思つた、日本の粹の概念からは遠ざかつてしまつたので、和もといふのはなかなか難しい。これは一般論

さて、話が変わるが、今般、貞奴フオラムが取り上げた萬松園の売買契書から、ひとつ大事なことがわかつた。貞奴の戸籍上の実名が明らかになつたのだ。漢字の貞ではなく、ひらがなで、いわゆる愛体仮名で、「尾多」をくすずした「きた」と表記されている。ここから解析できることは、さだに「読むこと」のできる数ある漢字から「貞」という一字を選んだのは、貞奴自身にちがいないかろうというところである。彼女自身にとって、「貞」という字はどのような意味をもっていたのだろうか。彼女自身の生一本な性格、義に敏く、道義を通さずにはいられない潔さを「貞」という字は、いかにもよく表している。もちろん、貞は貞節の貞でもある。この字の選択にも、貞奴の粹が窺はれている。こう考えると、福澤桃介との関係も、ふしだらといわれるような関係を、安易に許したとは考えにくいのである。彼女が福澤桃介を愛していたことは確かであるが、それは幼馴染への兄弟愛のような博愛の愛であつたのだろう。わたしたちとしては無理なく確信できる。なぜなら、貞奴は決して野暮をしない人だからである。

近年、贋物を大量に生産して大に伸ばし上つた国がある。またその隣の下貧乏な小国が危険なオモチヤを開発している。世には呆れ返る野暮が



多い。
あれこれ愚痴するのも話無いのので「槍さびを聴いては目を潤ませ、心身を浄化している」「槍さびびても」は貴重な歴史遺産なので、身籠るまで睦まじく聴き続けたい。

貞奴 槍はさびびても 名はさびぬ

承天

であるが、音楽大学的教養を金科玉条とする場合、下手すると野暮に陥つてしまふ。音にも時代性や風土を表す色や匂いというものがあからだ。特に作曲家や歌い手に邦楽の素養がないと、西欧至上主義的な模倣に終つた白濁したままの危険性もないではない。なぜなら、本場のオペラのような、音のみで構築した世界は、貞奴を表現しようとするから、座敷でフランス料理を食するような野暮を生じさせてしまふからだ。ところが、今回の作品は、冒頭、本物の足音による御詠歌が始まり、プロローグの締めくくりが不動王真言の大合唱という、あまりにも意表を突くものであつた。スター・臭さが吹き飛び、俄かに香の匂いがたつちめるようであつた。これが大きな救いとなり、一気に和の虚構空間に誘われたのである。開けば、御詠歌と真言の部分はもともと台本作者の指示であつたのか。作曲家が原作者の感性を尊重したことが功を奏し、野暮を免れたといえるだろう。

舞台は芸術としての成否だけではなく、主人公の毀譽褒貶をも世に晒す。その為には伝説の人の実像を、迷い認らせること、惣括せよう。観客に示さなければならぬ。作家は努力と費用を惜しず東奔西走して、蒐集する録の者を探し訪ね、何段となく取材を繰り返した。また資料も徹査して内容を丁寧に綿密に検証しなければならぬ。その上で知的な洞察力と高い見識を以つて創りあげるのだから、その作業量は大変なものになるだろう。が、映画でも舞台でも、役者によつて台無しとなる場合があまりにも多い。諸般の事情で極端なスキヤクを押し付けられると、名演出家といえども腕のふるいようがない。実在の人物をモデルとする場合、作家にも演出家にも役者にも、道義的に厳しい責任が科せられている。

この時の台本、オペラ貞奴「青風篇」は時代背景が克明で、登場人物の描写が史実と見紛はれほど生動しており、台本だけでも一巻の価値があつた。そこを踏まえた上演出だったと思つ、たとえ脇役でも、伊藤博文役や論吉の娘役などは、素人とは思ふほど、しつかりした役づくりがなされていた。良い脇役がオペラを盛り上げていたが、も

福澤桃介の評判

仲谷甚作



福澤桃介
1868年6月25日(慶應4年5月6日)生
1938年2月15日没(昭和13年)
(慶應4年9月8日までで。9月8日に政令
が出て、明治に改元。明治5年12月2日まで
は旧暦を採用。明治5年12月2日の翌日が明治6
年1月1日となります。)

後に福澤諭吉の婿養子となった桃介は、元の名倉崎桃介といい、武蔵国横見郡荒子村(現在の埼玉県吉見町)の貧しい農家に、岩崎一とサダの間の次男として生まれました。六歳のとき、岩崎の本家のあつた川越に転居したのですが、裸足で学校に通うほど貧しかつたにもかかわらず、神童とたたわれ、親戚の支援を得て、慶応義

塾生となります。やがて、福澤諭吉にその才知と眉目秀麗を認められ、諭吉の次女、房ふさの婿養子となった桃介ですが、約束されたエリートコースを結核で確に振ることになります。しかし、ハンダリー精神を発揮し、病床で株を振る研究し、相場師として大成し、天下にその名を轟かせます。後年は実業家に転身し、電力王として称賛されるようになるのですが、その一大転機を支えたのが貞奴でした。

時事新報の記者、大西理平はそんな桃介について、「福沢諭吉先生という善物を裏返して着たのが桃介である」といいました。桃介は拜金主義、だが福沢諭吉も拜金主義というのが大西の主張です。諭吉は弟子たちに「政治家や銀行マンにはなるな、事業家になれ」と言っていたそうですが、そのような考え方を指していたものと思われます。ここでいう拜金主義とは、守銭奴的な意味ではなく、現在でいうところのブルジョアイズムです。つまり、精神主義といつたほうがよいでしょう。「武士は食わねど」的な精神主義では、西欧列強に伍して近代国家を建設することはできません。具体的な科学・技術をもっと早く習得して、文明化を急ぐとする排日声

それが諭吉の「学問のすゝめ」でした。ここでいう拜金主義なる言葉も、それと同じ文脈で理解するのが妥当と思われ

ます。この合理的な実利優先の思想を、桃介は確かに福澤諭吉から受け継ぎました。が、桃介はあんな意味で諭吉以上に徹底していません。なぜなら、諭吉があくまで理念の普及にとまっていたのに対し、桃介はまともな、近代産業をひとつひとつ具現化していったからです。それが強烈な印象を与え、結果として、本来のものを大胆に破壊すると見られ、煙たがられたのです。憎まれて、嫌がられて世を渡れ。これが世渡りの一秘訣だと、桃介がいったのは、そのような生き方への自己弁明ともいえます。また「一人を見たたいが、いふ泥棒と思へば間違ひはない」という言葉なども、憎まれどけられるわけですが、信用

諭吉ゆずりの理想国家建設に役立てたいと考えたのでしよう。実業界への発心とは、まさにそのことを意味しています。

電力王福澤桃介と

電力の鬼松永安左工門

仲谷甚作

福澤諭吉と最も関係の深かった人物といえ、松永安左工門です。桃介より八歳年下の安左工門は、明治八年に岩崎島の旧家に生まれましました。幼名は亀之助といえます。福澤諭吉の「学問のすゝめ」に傾倒した亀之助は強い熱意をもって、家族の反対を押し切り、十五歳の時上京して、慶応義塾に入學しました。しかし、父親が亡くなったため、やむなく中退して家督を継ぎ、同時に二代目松永安左工門を襲名したので、実家の事業を軌道にのせた安左工門は、すべ

てを弟に譲り、二十一歳で再び慶応義塾に復学します。

福澤諭吉は「散歩党」というのを結成していて、早期から6kmの道のりを散歩することを日課としていました。そこには塾生のみならず、卒業生までが加わっていましたので、様々な人物と交流を深めることができたのです。福澤諭吉と知り合ったものときで、それ以降、桃介と深い親交を結び、起業、倒産、再起の苦業を共にする仲となつたのです。後に「日本の電力王」と呼ばれた桃介と日本の戦後後まで生き抜いて「電力の鬼」と呼ばれた安左工門。この二人の出逢いこそが、日本の近代産業にエネルギーを供給する



し、期待しても、その通りに行かないことが多かった経験から、裏切られたからといって相手を憎んだり愚痴ったりも仕方がないと、戒めている言葉と受け取れます。ここで、彼の実業家としての人生が必ずしも平坦だったわけではなく、信じては裏切られることへの繰り返しだったことがうかがえます。その上で、事業をなす覚悟を、彼は説いているのです。

と、そして手段に成功したからには、いよいよ本題です。「金持ちを倒すこと」に着手します。なぜ倒すかという、金持ち達は、金を社会に貢献することに使わず、無駄に食いつぶしているだけのよう

に見えるからです。腐った連中から資本や生産手段を取り上げ

相場師で金をもうけた桃介ですが、だんだん虚業が嫌になつてきます。「富者に対する反抗心が強く、金持ちになつて金持ちを倒してやろうと実業界に発心した」と、後年、述懐していましたが、この言葉をよく吟味しますと、「金持ちになること」が目的ではなく、「金持ちを倒すこと」が目的であることわ

かります。その手段として、金を得ること、その手段として相場を張るこ

と、金持ち達は、金を社会に貢献することに使わず、無駄に食いつぶしているだけのよう



松永安左エ門

1875年(明治8年)12月1日生
1971年(昭和46年)6月16日没

近代三茶人の一人として耳麻の号をもつ

心臓、大動脈を形成する礎となったのです。詳細は、別添の「年譜」を二参照いただくとして、ここでは二人の人物比較を試みたいと思

事業家としての安左エ門は、四九歳以降、欧米視察を終え、労務管理の重要性を認識し、経営者と従業員の間接改善に乗り出し、これは当時としては画期的なことでした。他方、個人の生活者としての彼は、五十歳を過ぎてもかかわらず、精力的に山登りをするようになります。北アルプス、南アルプスと四指近い縦走登山を敢行していますから、本格的なものです。山登り、人生、事業とよく似ていて述べられています。途中の苦勞が頂上立つた時に報われる感じがするからでしょう。一途に仕事に打ち込むだけではなく、人生に豊かさをもたらす別の何かをもつことによって、思考を深め、一元に陥らぬよう反省を、独特の哲学を織りこまげているのでした。ここが桃介と違うところでしょう。

桃介は事業そのものを楽しんでいたのであると云うことがあります。ザせん。非難の視線を浴びつつも、論吉の一族の生活を「身で支えていまして、そこは開きなおるしかなかったのです。株式投資で儲けるのは、必死で研究した成果なのだから、正当な報酬である」と主張し続けました。たいでいの人々が損をする局面でも、どく風の奇跡的な領域を生き抜いた桃介と、あくまでも「普通の人の領域をまっとうに生きること」に主眼を置いた安左エ門の違いが大抵が凡庸で構成される人間社会での評価を分らせることになつたのかも知れません。

しかし、桃介の引退後、電力業界の頂点に立った安左エ門は、最早「普通の人間」ではいられなくなりました。至るころで闘いを強いるようになったからです。役人の無明と権柄づくに手を焼き、民間の活力を奮うものとして官を嫌うように補う。軍に迎合する官の業を煮やし、「官吏は人間の屑」と言い放つたため、「天皇の勅命を怠らしている者への侮辱」と大問題になり、新聞に謝罪広告掲載させられたことすらあります。しかし生来の諦めのない性格から、孤立無援となる局面、四面楚歌をしばしば体験しつつも、それでも粘り続けるところから、とうとう「鬼」と称されるようになったのです。

人間じつて、そのような状況が苦しくないはずはありません。ともすれば冷えてしまおうとする彼の心境を救ったのが茶道ではなかつた。小川、彼が茶の湯にのめりこんだのは六十歳の頃です。益田純翁、小林一三、原三溪らとの折々の茶は、どれほど彼の心を癒したことで、昭和十六年以降時の政治家と衝突し「種々の役職を辞してからは、益々茶道に情を出すようになった。戦争反対だった彼は、戦争へと地響きまで傾斜して

一人のように愉快がって、遅れる人々を嘲笑うように、彼らの間を縫って走り、ハットトリックを決めるというような天才虎視した。実際には桃介も苦難の連続だったのですが、少なくとも周りの人間にはそのように映り、凡人には障に障るので、負け犬の連れのようにな甲傷が絶えなかったのです。他方、安左エ門は一見、粘り強い努力家のように見受けられました。そのときは彼は投機という事と、未練なく、さつと切り捨てた。桃介は、安左エ門は、そこを捨てずに執拗に尽力するので、とうとう桃介も方針を変え、安左エ門に協力せざるをえなくなるといふ具合でした。自然、人々は安左エ門を頼るようになるに、秘かに安左エ門に感謝と賞賛が集まり、人望も厚くなるという環境が形成されたようです。憎まれ役の桃介には気の毒でしたが、絶妙のコンビといえました。

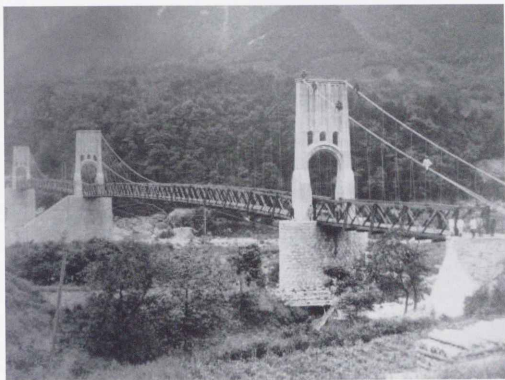
このようにいうと、安左エ門が桃介との関係で不当に得をしたように聞こえてしまふかも知れませんが、安左エ門が世間に尊敬されるべき、きちんとした理由にはあります。若い頃、二人で創業した丸三商會が倒産し、結核に倒れた桃介が天才相場師だったといつたころ、安左エ門も株で儲けまふが、安左エ門の場合、暴落時に逃げ遅れ、一文無しになってしまいました。そのときは彼は投機というものの恐ろしいリスクを噛み締め、これと手を切り、産業資本家として、生業に専念しようと思つたわけですが、私は功を急ぎすぎた。野心は必要だが方向が間違っている。投機を捨て去らなければ企業での成功も到底成し得ない」といのが、その時の彼の言葉でした。もちろん桃介も株で儲けることに世間体がなかつたわけではないのです。自身、株に手を出して損をしたこともある義父の福澤論吉は相場を毛嫌いし、これを賭博とみなしたため、桃介は論吉の一族から、博打打ちのように軽蔑されている気がしていたに違いない。

いく電しい世相と二線を描き、一茶人として隠遁する道を選びます。このことが、わたしたち後世に幸いしました。昭和十四年以来、彼の猛反対にもかかわらず、国家総動員的に民間の電力会社が統合され、半官半民の日本発送電が設立され、同社がすべての電力を管理していたのですが、終戦のいわゆる財閥解体の流れの中で、これを解体しなければならなくなつたのです。電力業界の主だった人たちは、統合時の見返り的に、大臣などになつていましたから、そういう人達は戦争協力人とみなされ、不適当と判断されました。そこで吉田茂も、否でも応でも、安左エ門を担ぎ出すしかなくなつたのです。安左エ門は、民主化をぶる委員全員の反対を押し切り、昭和二十六年、日本発送電を解体し、九電力体制を作り、今日の基盤を築きました。

その後は、政財界の重鎮として日本の復興に多大の寄与をした安左エ門ですが、鈴木大拙老師、小泉信三氏らと交流しつつ、日本の将来について、爽やかな熱情をもって語り合ひ、その思想をますます深めていきました。数々の著書を上梓していますが、トインビーの翻訳なども手がけています。叙勲を断つたこと、蒐集した各種の茶道具や骨とう品をすべて東京国立博物館他に寄贈したことなど、気骨ある人土として、幾多のエピソードをのこしました。

前半生は、桃介に引つ張られていた安左エ門ですが、後半生は、桃介を凌駕するほどの反骨精神を見せ、独自の人生観を培ひ、日本の経済を力強く牽引しました。それでも、桃介の存在なくしては安左エ門なく、安左エ門の協力なくしては桃介の成功もまた、おぼつかないものとなつていってしまふ。

【参考】松永安左エ門著作集



この美しい古写真は長野県南木曾町の桃介記念館に展示されているものである。大正十二年（一九二三年）読書村現在の南木曾町に、水路式読書発電所が建設されたのであるが、それに先立ち、一年前の大正十一年に、資材運搬などの足がかりとして、当時としては画期的な大規模橋梁が木曾川に架設されたのである。この木製の橋は施主福澤桃介の名にちなみ、桃の橋、あるいは桃介橋と呼ばれていた。

男伊達なら

鈴木静夫著 「木曾谷の桃介橋」解題

1994年
NTT出版

藤本尚子

男ナアー 中乗りさん
男伊達なら ナンチャラホイ
この木曾川の ヨイヨイヨイ
流れナアー 中乗りさん
流れる水 ナンチャラホイ
とめてみる ヨイヨイヨイ

一説によると木曾節の歌詞は五百番まであるそうだ。その中で、右の部分は十五番以降に登場する。「男伊達ならこの木曾川の流れる水とめてみる」という一節は、不可能とされた木曾奔流を見事に堰き止めてみせたというので、福澤桃介の水力発電事業と対峙させ、よく引き合いに出される。峻険な山あいを繞って走る木曾川はまたの名を蘇水といい、男伊達を鏡う檜舞台として、まさにふさわしい荒がる自然の大動脈といえる。木曾はまた、繪の美林で知られる。明治維新以降、富内省管轄の御用林となったが、伐採された材木を一本ずつ、川狩という方法で木曾川に浮かべて運ぶことに変わりはなかった。七十日をかけて八百津錦織まで下り、そこで初めて筏に租まれ、大山を経て、名古屋白鳥野場に運びこまれたのである。

る。木曾節はこの川狩人の歌であった。

木曾は山も川も雄壮である。雄壮でありながら森閑としている。そぞり立つ崖が川面を下る人間を厳しく監視しているようでもある。頬をうつ風の冷たさ、足元の水しぶきが、片時の弛緩も許さない。そこでは自然が人間を完膚なきまでに圧倒しているように見える。この大自然の一隅に人々をひびきつと謙虚に暮らしており、大言壮語を厭う機まじさを保ちつつ、風雪に鍛えられた胆力としゃんと伸びた背筋で、日本国を相手に堂々とももの申すほどの気骨を秘めている。

そのような木曾の人の典型といえる人士、それが島崎広助であった。馬籠本陣の次男に生まれ、妻籠本陣の養子となった。近代の代表的な詩人、島崎藤村の長兄にあたる。藤村の「新生」に登場する愛人節子のモデルとなったごま子の父親として、塗炭の苦しみを経験した人でもある。鈴木静夫氏はこの島崎広助に焦点をあて、木曾に生きた人々の実相を暮らしぶりをと細かにレポートしている。この木曾の人々に一時期間き合った桃介、細奴の偉業を研究する人々にとつて、傍証文献として、鈴木氏の著述は信頼に足る貴重な資料といえよう。

あろう。身近にゆきじしい女性の内助がなくて、とうていかなわぬ夢であったらう。

この間、貞奴の消息はどうなっていたかというところ……明治四三年に、川上夫妻は大阪で最初の洋式劇場「帝国座」を建設し、その維持運営に心血を注いでいた。これにも桃介は支援を惜しまなかった。しかし明治四四年、首二郎が他界すると、その後も演劇活動を続けていた貞奴への世間の風あたりは強くなる一方であった。大正六年、遂に貞奴は翌七年に名古屋一葉町で桃介と合流、自らも川上絹布という会社を設立し、実業を志すことになった。この同居によって、桃介の健康管理に主眼を置いた私生活面での後方支援体制が整ったといえる。こうして後顧の憂いのなくなった桃介は、大正八年、電力事業の一つ目のピクを迎える。夏には木曾川開発の拠点、大洞山荘（現在の桃介記念館）が完成し、秋には賤母発電所が操業を開始した。鈴木氏はこの頃の課題点を克明に報告している。



帝国座(大阪歴史博物館所蔵)

いた水利権取水水量ではとうてい足りなくなつたため、桃介は取水量の増量を長野県知事赤星典太に申請した。許可の条件として、知事は、それまでに名古屋電灯が二百万を投じて銅柱林向けに敷設した軽便鉄道と同等のものを、今度はい民間向けに敷設すること、そして魚類など生態系の維持と繁殖保護の遵守を命じた。一つめの条件は三万円、寄付金形を要した。これに広助は激怒し、「名古屋電灯木曾河水使用につき都立意見書」なる檄文のもとに、地元民を結集した。明治三十九年の広助の提案を熟読した人々は、桃介側の水利権主張に直面して初めて、広助の先見性に刮目した。地元の人として、広助に交渉を委託する契約が結ばれた。しかし、その契約案項の中に、町村長側の提案で、獲得した補償費の四割を、運動経費として広助に支払うという条件が含まれていたため、後に誤解を生じ、そこを楯子とした金銭側の攻勢によって切り崩されてしまうのである。遂には暴力沙汰が発生し、泥沼化が懸念されたのであるが、広助が身を引き、長野県知事が交渉を引き継ぐことで和解した。

この広助の深い引き方もまた男伊達だと思ふのである。最終的に、名古屋電灯改め大同電力は、大正十一年以降、二六年間、毎年三万円を支払うことで合意が成立した。元は三万円の寄付が七八万円の補償費に変貌したのは広助の功績である。その広助は運動に要した経費の半額しか回収できなかったという。それでも恬淡として負荷に甘んじた広助にシンパシーを寄せ、誤解の泥濘から美しい魂を救いだして、わたしたちに示してくれた鈴木氏の男伊達にも感動せずにはいられない。桃介の最晩年、偶然に広助の窮状を知った桃介が支援を申し出るが、広助はそれも断つてしまふ。それでもかつて敵対した手強い相手に救援の手をさしつべやうとした桃介の男伊達も立派に筋が通っていたのだらう。

一期一会の芸道

藤本尚子

首二郎・貞奴に対する国際的評価の妥当性をめぐって

幸運にも、日本ブームという波に乗ったがために、タイミングよくその波の頂点に押し上げられた船、それが首二郎・貞奴である。首二郎・貞奴のような文脈が今日もお、しどろく繰り返されている。その論が正しいならば、評価されたのは首二郎・貞奴ではなく日本の文化・風俗にすぎないということになる。そこから演劇的に語られるのが、首二郎・貞奴が西欧社会に示したものは日本傳統的芸能の真髄ではなく、似非・歌舞伎であり、イミテーションにすぎなかったという決めつけである。これが二人の功績を貶める論拠となつて、性懲りもなく再垂されていく。このような言いぐさは首二郎・貞奴にとって不当であるばかりではなく、彼らを最大の賛辞で迎えにくれたヨーロッパ批評界に対しても、相当に失礼といわねばならない。もし川上一座の芸が上面だけのお粗末なものにすぎなかったとしたら、たちまち日本文化への失望が蔓延し、ブームそのものが急速に冷え、飽きられ、捨て去られてしまったであろう。ところが現実には、貞奴の登場で、日本ブームにさらに激しい火がつくことになり、日本と日本人への国際的評価が固まったとい

つてもよいくらいだ。この事実の重みをこそ、解析しなければならぬ。首二郎・貞奴の真価を、日本の伝統文化との絡みにおいて、今こそ真剣に、居住まいを正して、問い直すべきであらう。

海外公演用「藝者と武士」の功罪と道成寺原典の呪縛

森田雅子氏はその著作「禁じられた演劇」において、「藝者と武士が日本を代表するステレオタイプとなつた」と述べ、いまだに日本を代表するステレオタイプがありつづけたとして、いささかの不満をこめつつ、問題視している。が、轟轟たる国内批判を巻き起こした首二郎による原テキストの改竄については、多様な異文化の視線の中で相対的に測られ理解される「文化のエッセンス」を伝える方法論として、伝統の体裁ばかりを重視する仰々しい本物よりも、趣とを直感させる簡素な偽物、首二郎を擁護する側に立っている。

しかし、このようにいう場合、そもそも原テキストとは何か、それを特定できるのか。無数にある「道成寺」のテキストのうち、一七五〇年以降、日本で最も多く演じられたのは「京鹿子娘連成寺

であろうが、ネタ元としての蛇体変化のモチーフを通行するから、古事記の昔から存在する、数かきなりなく演者によって書き換えられてきた歴史があり、むしろこのように書き換えることこそが伝統ではなかったのか。

本を特定できないテキストの基本的プロットを活かしつつ、いかに効率的に再編集するかということについて、音二郎はむしろ天才的な手腕の持ち主といえたのではないだろうか。それに、数ある演目の中から、なぜ道成寺をも選んだのか。貞奴の資質を活かすというだけなら、なぜそこに「浮世柄比翼稲妻」の「吉原夜桜の場」を折衷したのか。そこに問うのが筋ではないだろうか。冒頭で愉快なカツボシを見せ、次に日本刀による立合いを見せ、この活劇を序として「序・破・急」を構成するためだ。なかなかどうして伝説芸を知らないのではない。さほど演じられていなかった「傾城道成寺」(葛城道成寺)の要素を採り出して、このなかにも、複数のテキストを派風済みだつたことがわかるし、能・歌舞伎におけるプロットの構成法に習熟していた痕跡もうかがえる。

音二郎はどこでそれほどの手腕を身につけたのだろうか。おそらく実地に数多くの舞台を観て、観客の反応を分析し、批評する経験の積み上げによるのであろう。ただただ既存の演しものを再現することとに値し、既定の身振りを型通りに覚えて模倣し、単純再生に腐心するというようなところに、真の伝統の継承はない。音二郎の戯作者性はそこを見切っていたにちがいない。

では何を表現したくても大胆な書き換えを敢行したのだろうか。一連の道成寺ものが「醜い嫉妬による変化」をテーマとしているのに対し、音二郎本は「人の情」を主題とした。いちずち男

けようがなかった。それは貞奴の舞踊が完全に「型」を踏襲し、彼女の個性に帰属する芸術的主張も「型」の内側に緊張を孕んで凝集していたからではないだろうか。

日本文化のエッセンスというなら、「型」あるいは様式性、倫理哲学を底部に沈潜させた「道」の観念を問題とせざるを得ない。日本の伝統芸能における「型」とは、膨大な歴史的時間において累積された修行経路の成功例を集団作業によってたえず取捨選択していった終りなき洗練の最終局面を集約した暫定の結晶だ。そこに底流する理念、哲学と技術的洗練の合体したものを「道」と名付けている。貞奴の足腰はこの浮遊離した芸術的異界で、一部の隙もなく鍛え抜かれていた。

貞奴の芸の本質を問うなら、幼少期より身についた「形」より出でて、人生の辛酸をなめるにつれて「心」に入り、流れる雲のように変容しつづける心より出でて、より研ぎ澄まされた形に入り、指先や目線、緊張をみなぎらせていく、そのような二期への弁証法的な生成力ではなかっただろうか。一刻一刻、生死の線を超え、足を進んで来た彼女ならではの、余人の模倣しがたい超絶的な境地が、こうして現したのであろう。つまり彼女の存在自体が「命がけ」の張りつめた美しさを湛えていたのだ。これを単なる容貌として片付けるのではなく、精神性に起因する凛とした行まいとして、外観に対する評価をも深化させていかなければならない。

より一般化しているなら、このような「命がけの緊張」こそが「型」を結晶させた「導」に触媒的作用を果たしている。この辺り開始人が首と「導」触媒の役割を果たしている。この「導」を結晶させた「導」と「魂」の和魂が依拠するのである。「武士道とは死ぬことと見つけたり」といふ葉隠流「絶対的敵身」

を慕う日本女性の健気さと、その情にほだされ、女を恋しむ日本男子の懐の深さ、包容力を表現しようとしている。だから蛇体への愛がないのである。貞奴演ずる葛城は狂い死ぬほど古屋山三郎を恋い慕い、純粹で美しい魂として描かれており、嫉妬、憎しみに憑かれた恐ろしい化物とは一線を画す。しかもこれは、ひよっとすると、恋愛を遊びとしてしまう欧米の社交界の感覚に対する音二郎の無言の批判であつたのかもしれないのだ。恋に命をかける生粋な日本人を強烈にアピールしたようにも見える。皮肉なのは、嫉妬・復讐・怨念」を結論にもつてくる原テキストより、「恋の形而上学」を見据えた音二郎本のほうが、より文学的といえることだ。これを詳細に検討もしないで、陳腐な陳腐と決めつけた日本の批評界こそが未成熟であつたと、そろそろ正直に認めてもよいのではないか。

「死を觀念すること」が生む

ところでより重要なのは、ここでいう日本文化のエッセンスとは何かということである。これを問ひ詰めない限り、それと音・貞との距離が測定できるはずがない。そして、それに触れない議論は今日われわれにもたらさないであろう。

音二郎が西欧人に目した日本文化のエッセンスとは、理想化された武士と理想化された芸者であつて、それらの戯画的なステレオタイプではない。意地、理想、理想に命をかける音二郎自身の象徴としてのサムライ性と、恋に命をかける身も心も美しい、しなやかな女性の像を、欧米の舞台上に現させた音二郎の感性と批評精神を今日のわれわれ自身が、まだまだ甘く見すぎているといわねばならない。しかし既に疑いをいれないのは、貞奴の至善に対する評価である。伝統芸能に造詣の深かつた久保田米吉から、文句のついでに、

の回路との接点がゆらめきつつ現れるのである。実際、貞奴はそのような氣風が濃縮した政財界重鎮の娯集する環境に育つたのである。従つて、こういう一種の構えもまた、幼少期より自然に身についたのであろうと考えるのが妥当ではなからうか。

とはいへ、貞奴の「死を觀念する」スタイルは武道的なものではなく、仏教信仰との関係で、より多く語られるべきであろう。仏教はその最も縮小化された利益の解釈ですら、この世の功德が来世への預金となるのであるから、十分に功德を積んだ上は、さつさと死にたくなる道理である。苦惱にみちた穢土を去り、彼岸の樂土に往生をせよと願うのであるから、まっとうな信者であれば、少なくとも死に対する恐怖はない。死が怖くない上、祈りや瞑想による集中法を身につけた貞奴の強さは、おそらく、比類なきものであつたであろう。彼女に接したとき、典型的な近代化主義者であつた福澤桃介ですら、仏教に帰依せざるをえなかったものごとを成就させる不屈の推進力そんなオラにみちた貞奴を身近に置くことを見て、男たちが命がけの勇氣を示さざるを得なかつたのだ。死を觀念して初めて超人的な仕事を得ると、今日のわれわれも知らねばならない。

芸の道にどまらず、実人生においても常に二期一会の緊張をもつて臨んだ貞奴。故に、彼女は無類の教育好きでもあつた。川上絹布の女工たち、児童劇団の子供たち、身近に働く女中たわむ、常に本来の生き方を学ばせたいと願つた。彼女の実世を問は、わがままな女と受け取らなかつたのであるが、緊張を欠いた、上の空の仕事ぶりもまた、人々の「一期一会」の人生を裏のたのらう。このした対応もまた、彼女の愛情表現にほかならなかつた。

貞奴フォーラムとは

「貞奴フォーラム」は、貞奴に関する学際的な取り組みを通じ、貞奴に関心をもちすべての方々の相互交流と親睦を図ることを目的としたオンラインイベントです。従って、この趣旨に賛同していたらただけでなければ、どなたでも参加していただくことができます。そして、わたしたちのこの呼びかけは、たいそう時宜にかなっていると思っております。

なせ今、貞奴かと申しますと、彼女の生まれた時代に呼応するがごとく、わたしたちの祖国日本が今大きな転機期にさしかかっており、国民の間に国家の存亡に関する危機意識が芽生えているからです。第二次世界大戦直後の時代を大掴みに定義するならば、アプレゲル時代の時代といえるかと思えます。それが今、終わつたとは、はつきり感じます。敗戦の様々な後遺症から、ようやく脱脚をはかろうとしている。そう思えてなりません。

戦中派といわれた人たちの大半が世を去つて、戦争を知らない世代



し、意気阻喪しています。あの時代とこの時代、何がこんなにも違つてしまつたのか。貞奴が生れた瞬間から一四〇年の間に、わたしたちの得たもの、そして失つたもの、日本人の魂の遍歴を、そろそろ、きちんと総括しなければと思うのです。

貞奴が何を考え、どう生きたのかを、つぶさに見極めていくことがきつと、わたしたちにとっての明日へのヒントを尋ねてくれるに違いありません。それはまた、くすんでしまつた日本人の輝きを取り戻すための、埋火を掘り起こす作業でもあるのです。

貞奴フォーラムのあゆみ

貞奴生誕一四〇年を迎えようとしていた前年、二〇一〇年のことです。貞照寺を管理して下さっている成田山名古屋別院大聖寺の小豆畑親観部長のふとしたつぶき、「貞奴サミットを開きたいと、ずっと思つてきました」という言葉が誘い、水となつて、「貞奴フォーラム」と題したイベントを企画することになりました。

その年の瀬、第一回貞奴フォーラム開催に向けて、発起人の協議が開始されました。明けて二〇一一年、いよいよ生誕一四〇年となる七月まで余すところ半年となった四月十四日、急遽、第一回貞奴フォーラム実行委員会が発足したのです。

代がこの国の舵を取り始めました。所得倍増・高度経済成長へと日本を牽引し、繁栄を築いたのは、今は亡き戦中世代でした。にもかかわらず、その世代は、無謀な戦争を引き起こした張本人として、旧世代を糾弾し続けました。そして旧世代のものの本心方や習慣を全否定し、それをもつて正義と錯覚しながら、上昇気流を満喫したのでした。そして、このバブル崩壊後の失われた二十年に直面し、「唯だとして」です。長く続いた求来人難の環境が消え、リストラ大失業時代に唾吐する今日を迎えたのか、近代史を振り返り、よくよく検討しなければなりません。

その近代は「太平の眠りを覚ます上喜撰蒸気船」、たつた四杯で夜も眠れず」という川柳から始まりました。外圧に揺さぶられ、日本という国家について、海に囲まれた領土について、世界から取り残された祖国の行く末について、日本人という意識を鋭く研ぎ澄まし、それが限られた能力を振り絞り、人々が切歯琢磨した時代、それが幕末から福澤桃介の電氣事業が成功するまでの時期であったと指定できません。すると、その時代、政治・経済の中核に絡みつくようになり、臆に見え隠れします。

翻つてみるに、二〇一二年秋、尖閣、竹島の領有をめぐる揺れた日本の状況は、日清戦争前夜の危機意識と、どこか似かよつた時運臭が漂いだしたような気配です。衣を替へたアングラゲル時代の代が始まつたのかも知れません。ひとつ言えることは、われわれの時代は維新・明治の時代と異然と違つていて、どうです。この時代は維新・明治の時代と異然と違つた精神の付まいを喪失

もうひとつ。単発のイベントに終わるのではなく、継続的な学習を積み上げていかねば意味がないという認識がありましたし、あまりにも淋しい貞奴さんへの命日をなんとか盛り上げたいという願ひもありましたので、毎月命日の七日に定例会をもつことにしました。二〇一一年二月から、ほぼ毎月、貞奴ご靈廟周辺の清掃をし、うる寛文の拙い不動明王ご真言で、お祈りをした後、勉強会を開催するようになりました。盆と正月におみえいただくのですが、他にも、萬松園オナオナのご好意で萬松園でのお茶会や食事会に振り替えられることがあります。少人数ながら、いつも和気藹々と次回を楽しみにしながら、続けさせていたいです。

さて、わたしたちもとりましては初めてのビッグイベント第一回貞奴フォーラムは二〇一一年四月二五日に開催されました。速くは博多から、川上音二郎ご遺族の川上浩ご夫妻と、音二郎の研究家として知られる高名な漫画家、長谷川法正氏、博多町家ふるさと館学芸員の松尾由美嬢が、そして芽ヶ崎からは芽ヶ崎美術館館長として音二郎・貞奴展を企画したつた小川俊館長と音二郎・貞奴を顕彰する会の山口洋一郎代表らのご茶会をいただきました。貞奴の直系のご遺族、川上新一郎教授が埼玉県大宮から駆けつけてくださったのは、うまでもありません。他にも貞奴を育てた濱田家の可免吉さんのご遺族で、写真家の浜田聡（朝氏）にもご臨席いただきました。なにはともあれ、貞奴・音二郎に関心をもち、人々が一堂に会すること、それが目的でした。こつた方々と、貞照寺にて、ご住職である成田山名古屋別院主監宮本照剛大僧正による護摩法要をいただきました。その後、長谷川法正氏の記念講演と前述の一部の方々をパネリストとしたシンポジウムを開催させていただきました。次第です。川上別荘サクラハウスにて創作オチバ貞奴出演者による記念コンサート、萬松園でのお茶会と、夢のような一日でした。（詳細はHP）

弔辞



二〇一二年十二月二十八日、貞奴のお孫さん、川上朝雄がお亡くなりになりました。貞奴の足跡について、探求したいと願っていたわたし達にとりまして、大切な支柱を失った感を否めません。長らくお林の不調を訴えておられ、再度お目にかかることもできないまま、お別れとなつてしまいました。貞奴さんの墓前に立つ度に、わたしたちの活動を温かく見守ってくださっている初様の気配が、梢をわたるそよ風となつて届いているような気がしたのです。キヤフオンを付して整理したい写真の山などを、読み解いてくださる貴重な方として、心頼みにしてまいりました。これでも、ご助言をいただきたくもできなくなつてしまいました。

合掌

謝辞

貞奴フォーラム機関誌「香葉」創刊号発行につきまして、まずは、ご理解ご協力をいただきました貞照寺（住職 成田山名古屋別院大聖寺主 監 沼本照正）に御礼を申し上げます。巻頭を飾る特別寄稿を頂戴しました各務原市長、森 真様、現衆議院議員であり貞照寺檀家総代でもいらっしゃる武藤容治様、川上別荘院議員であり貞照寺檀家総代でもいらっしゃる森田満夫様には、発行が遅れましたお詫びと、心よりの感謝を捧げたく存じます。末尾になり恐縮ですが、快くインタビューに応じくださった貞奴ご遺族の慶応大学斯道文庫教授川上新一郎先生と、貴重な資料を提供してくださった井端瑠美子さんに、特段の感謝を申し上げます。

編集後記

機関誌「香葉」の発行を視野に入れたのは二〇一一年夏のことです。第一回フォーラムの討論の内容はホームページにまとめさせていただくことにして、この雑誌には、わたしどもの学習の成果を集約することにしました。今回は井端瑠美子さんから提供された新発見の「萬松園」売買契約書につきまして、裏づけとなる古い籍本も入手できました。その特集とさせていただきました。お気付きの方もあろうかと存じますが、各務原市鶴沼にある貞奴のこの別荘の名称は、伊藤博文揮毫の扁額が示す通り、「萬松園」が正しいのです。それが、いつの間にか、「晚松園」と誤記されるようになってしまいました。そのことについて、今はじま川上初様より、数度におたり、厳重な抗議をいただいたものです。

「こうしてそのような誤りが発生したのですか」とお訊ねしましたところ、山口埴子さんの著書「女傑貞奴」（一九八二年新潮社）の中の誤植が原因とのことでした。その書籍は初めてまつとうに貞奴を扱った信頼度の高いものでしたので、貞奴に関心をもつ人々はずぶからくそこを頼るようになったのです。「必ず訂正してください」と強くおっしゃっていた初様のお言葉が、とうとう遺言となつてしまいました。この創刊号は、とりあえずの試作品で、体裁等も、ま一步の不調法を免れませんが、内容につきましては、わたしどもの勉強に取り組む姿勢であるとか、貞奴に関する描いている共通のイメージであるとか、そういう雰囲気はお伝えてきていると思います。継続は力なりと申しますが、この間、月例の勉強会を続けてきたことがようやく実を結びましたと実感しているところです。一人でも多くの方に本書を手にしていただき、趣旨にご賛同いただいた上で、ぜひ、仲間として参加していただきたいです。

貞奴フォーラム代表 藤本尚子

執筆者紹介

特別寄稿

森 真 (各務ヶ原市長)
武藤容治 (貞照寺檀家総代・衆議院議員)

各務原市立中央図書館

114300155

114300155

香葉 創刊号

付録

福澤桃介・貞奴・安左工門：比較年表

仲谷基作

西暦	和暦	福澤桃介	川上 さだ	松永安左工門
1868年	慶應4年=明治元年	0歳		
1871年	明治4年		0歳	
1874年	明治7年	6歳		
1875年	明治8年			0歳
1878年	明治11年		7歳	
1883年	明治16年	16歳	12歳	
1886年	明治19年			
1887年	明治20年	20歳		
1889年	明治22年	22歳		15歳
1890年	明治23年			16歳
1893年	明治26年			19歳
1894年	明治27年	27歳	23歳	
1895年	明治28年			21歳
1896年	明治29年			22歳
1898年	明治31年	31歳		24歳
1899年	明治32年	32歳	28歳	25歳
1900年	明治33年	33歳		26歳
1902年	明治35年			
1906年	明治39年	39歳		32歳
1907年	明治40年	40歳		
1909年	明治42年	42歳		35歳
1910年	明治43年	43歳	39歳	36歳
1911年	明治44年	44歳	40歳	37歳
1912年	明治45年	45歳		38歳
1913年	大正2年		42歳	39歳
1914年	大正3年	48歳	43歳	
1916年	大正5年	50歳		42歳
1917年	大正6年	51歳	46歳	43歳
1918年	大正7年	52歳	47歳	
1919年	大正8年	53歳		45歳
1920年	大正9年	54歳		46歳
1921年	大正10年	55歳		47歳
1922年	大正11年	56歳	51歳	48歳
1923年	大正12年	57歳		49歳
1924年	大正13年	58歳	53歳	50歳
1925年	大正14年	59歳	54歳	51歳
1926年	大正15年	60歳		
1928年	昭和3年	61歳	57歳	54歳
1929年	昭和4年		58歳	55歳
1932年	昭和7年		61歳	
1933年	昭和8年		62歳	
1934年	昭和9年			60歳
1937年	昭和12年		66歳	63歳
1938年	昭和13年	70歳		
	昭和20年		74歳	
1946年	昭和21年		75歳	
	昭和24年			75歳
	昭和26年			77歳
	昭和28年			79歳
1971年	昭和46年			97歳

出典 岐阜地方務局登記簿(写)、関西電力発行「電力王・桃介と木曾川」、山口玲子著「女優貞奴」年表、松永安左工門著作集第6巻、年譜



弔辞



謝辞

貞奴フォー
ご理解ご協
寺主監宮本
巻頭を飾ス
院議員であ
萬松園オー
りの感謝を
未尾にな
ご遺族の慶
してくださ

福を乞

物流管理部 お客さま係
〒新座市野火止7-2-35
ブックナリー A棟4階
20-118491

執筆者紹介

特別寄稿

森 真 (各務ヶ原市長)
武藤容治 (貞照寺檀家総代・衆議院議員)
森田満夫 (川上別荘萬松園所有者)

その他の執筆者

江尻勝典
仲谷甚作
西田 壽
藤本尚子
檜野孝子
森 須子
森田節子

創刊の辞共同執筆

貞照寺住職(成田山名古屋別院大聖寺主監兼務) 宮本照剛
2012年度貞奴フォーラム代表 藤本尚子

写真提供

川上 初様 創寫館様 関西電力様 渡辺 勉様

香葉 創刊号
二〇一三年一月一日発行
監修 藤本尚子
発行者 貞奴フォーラム
(本部)岐阜県各務原市
御泊宝積寺町貞照寺内
印刷所 SDS出版
岐阜県多治見市住吉町
送料及び発送手数料ごみ
定価七〇〇円
現地販売価格 五〇〇円

各務原市図書館



T1430155

